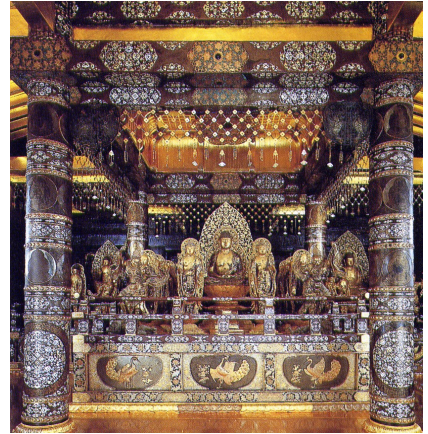


[文化史⑥－院政期文化(平安時代末期の文化)－]

[A] 建築

文化の特徴のところでは話したけど、この時代の文化はさして国風文化と変わりはない。末法思想により浄土教が隆盛していて、これが地方へも普及していく。それがこの時代の仏教の特徴だったね。だから、国風文化の頃には、中央にしかなかった阿弥陀堂建築が、院政期になると地方へと普及していくんだ。そのため、地方でも阿弥陀堂の建築物が建てられていくようになる。



[中尊寺金色堂]

こうした地方に建てられた阿弥陀堂建築の中で最も有名なのが、藤原清衡が陸奥国(岩手県)平泉に建立した中尊寺金色堂だ。これはその名の通り、内側も外側も金箔が押されてある金ピカの建築物だ。もともと奥州は金の産出量が多いため、それを背景にして建てられたわけだね。そして、内部には奥州藤原氏3代(清衡・基衡・秀衡)の遺骸が納められているんだけど、この2代目の基衡も毛越寺を、3代目の秀衡も無量光院をそれぞれ建築しているので、そちらも押さえておこう。なお、奥州藤原氏を滅亡させることになった4代目の泰衡は特に何も建立していないし、中尊寺金色堂にも遺骸は納められていない。

<奥州藤原三代の覚え方>

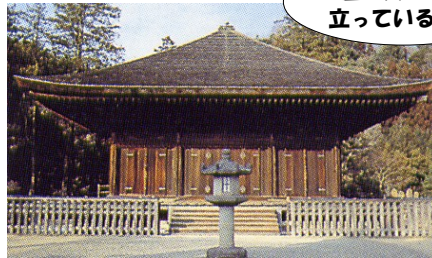
☆「肝冷やす、チューも無料!？」

き→清衡/も→基衡/ひ→秀衡/やす→泰衡/チュー→中尊寺/も→毛越寺/無料→無量光院

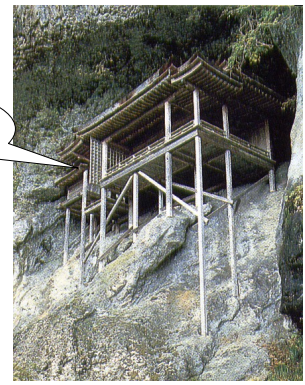
この中尊寺金色堂以外で代表的なものは、大分県(豊後国)にある富貴寺大堂や、福島県(陸奥国)にある白水阿弥陀堂、鳥取県(伯耆国)にある三仏寺投入堂といった阿弥陀堂建築がある。でも、この三仏寺投入堂は崖に立っているんだけど、よくこんな所に建てたものだよ。



[富貴寺大堂]



[白水阿弥陀堂]



[三仏寺投入堂]

崖の真ん中に立っている!!

<阿弥陀堂建築の覚え方>

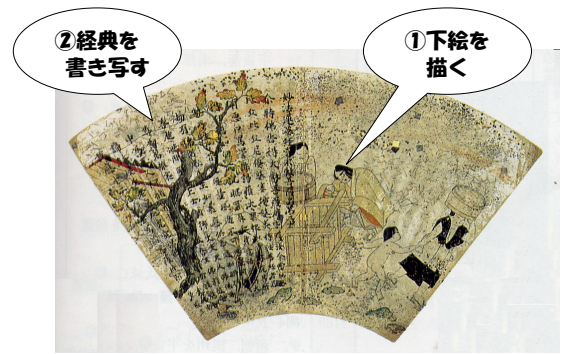
☆「鳥さん、だいぶ富貴な白い服」

鳥→鳥取/さん→三仏寺/だいぶ→大分/富貴→富貴寺/白い→白水/服→福島

[B] 絵画

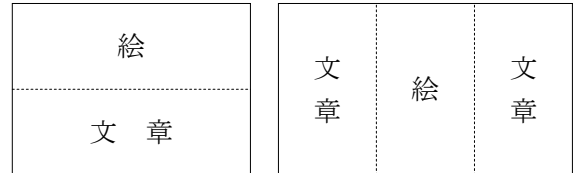
こういった浄土教隆盛の背景となった末法思想の影響はやっぱり大きくて、その一つとして装飾経というものがある。これは、経典の一種なんだけど、一言で言うと貴族などによって制作された豪華な経典のこと。例えば、紫色とか紺色などの紙の上に、金や銀で経文(お経の文)を写したり、絵などを書いたりするんだ。この時期には末法思想の影響から浄土教が流行していたよね?だから、貴族たちは極楽往生や、自分たちの繁栄や安全を祈って、経典に美しい装飾を施して、寺社に奉納していったんだ。

こうした装飾経の中で「扇^{おうぎ}」形の紙に經典を書写したものが『**扇面古写経**』だ。これは、まず、紙の上に大和絵で当時の庶民や貴族の生活を描く。そして、その上から經典を書写していき、後でそれを寺社に納めるんだ。ちなみに、現在その扇面古写経は、大阪の**四天王寺**や東京国立博物館に所蔵されている。また、平家の**平清盛**も、一族の繁栄を祈願して『**平家納経**』を**安芸国(広島県)**の**厳島神社**に奉納している(この厳島神社参詣のために、**安芸国(広島県)**に開削(新築)された港が**菅戸瀬戸**である)。

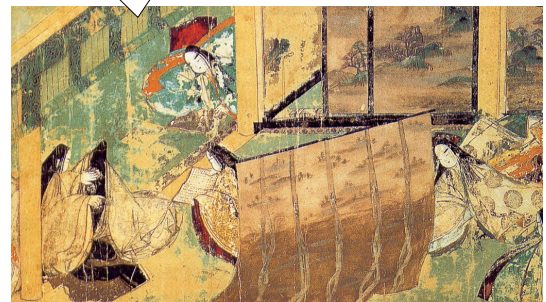


〔扇面古写経〕

国風文化の時期には、日本風絵画である大和絵が描かれるようになったよね。これを機に、文章と絵を組み合わせて、よりわかりやすくする**絵巻物**がこの院政期に描かれるようになったんだ。この時代は、貴族に対して庶民などの識字率(文字の読み書き能力)は低いから、文章が読めなくても絵で何となく雰囲気がわかるしね。なお、絵巻物の描き方には、右のように上に絵を描いて、下に文章を書くといったものや、絵と、文章を交互に書いていくといった2通りがある。



天井や屋根を描かない
吹抜屋台の手法!



〔源氏物語絵巻〕 by 藤原隆能

こうした絵巻物で有名なのが源氏物語を題材にして**藤原隆能**が描いた『**源氏物語絵巻**』だ。今では滅多に見なくなったけど、2千円札の表に描かれているのが『源氏物語絵巻』なんだよ?ちなみに、この描き方は室内の様子を描くために天井や屋根を取り払った**吹抜屋台**の手法が用いられていて、人間は根本式画風にそっくりな**引目鉤鼻**で描かれているよね。

他にも、**常盤光長**が描いた『**伴大納言絵巻**』も有名だね。これは、**応天門の変(866)**を題材にしたものなんだけど、応天門の変で失脚した人物の名前と、その官職名を答えられるかな?

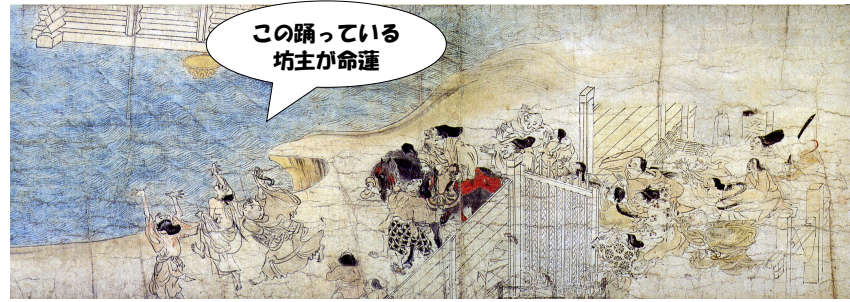
当時、**大納言**の身分にあった**伴善男**は、左大臣の**源信**を失脚させようと企んで、応天門に放火をした。しかし、結局その事件の真実が発覚しちゃって、伴善男らは流罪とされてしまった。これが応天門の変だったよね。おそらく事件の真相は伴善男らが犯人なんだろうけど、この事件ももしかして実は藤原氏による陰謀だったのじゃないか、という噂もずっと存在していた。そのため、この『**伴大納言絵巻**』では、その**大納言**の**伴善男**を悲劇の主人公として扱っているんだ。これで『伴大納言絵巻』の「伴」と「大納言」の意味がわかったかな?



〔鳥獣戯画〕 by 鳥羽僧正覚猷

一方、**鳥羽僧正覚猷**の描いたといわれる『**鳥獣戯画**』。これは動物を擬人化して、貴族や僧を皮肉ったものなんだ。絵を見ればわかるけど、猿の坊主がカエルの仏像に対してお経を唱えていたりするでしょ。当時の仏教界が腐敗していた様子をこういった風刺画でおちよくって見たんだろうね。

また、大和の信貴山を復興させた命蓮みょうれんにまつわる奇跡を描いたのが『信貴山縁起絵巻』だ。縁起絵巻というのは、その寺や神社が出来た由来などを記したものだんだけど、なぜこういったものが描かれたのか？それは単純な理由なんだけど、信者を獲得するために、その寺がなぜ信仰されるようになったかを示そうとしたから。ちなみに、余談だけど、この絵巻物が起源となって、今現在日本の文化として定着したものがマンガなんだよ。



〔信貴山縁起絵巻〕

こうした絵巻物は鎌倉時代にも描かれるんだけど、まずはこの院政期に描かれた絵巻物をちゃんと覚えておかないとね。そこで以下のゴロで覚えておけばいい。

＜院政期の絵巻物の覚え方＞

☆「原人番長失禁さ」

原人→源氏物語絵巻／番→伴大納言絵巻／長→鳥獸戯画／失禁さ→信貴山縁起絵巻

〔C〕文学

この院政期には徐々に武士という勢力が力を強めていった時代でもあったよね。源氏や平氏といった武士団が成長していき、やがて平将門の乱とか、前九年の役、後三年の役といった戦いが起きた。10世紀になると、こういった武士による本格的な合戦が起きたことから、合戦をテーマにした軍記物語ぐんきものがたりというジャンルも書かれるようになったんだ。それが、平将門の乱を題材にした『将門記』であったり、1051年の前九年の役を題材にした『陸奥話記』だ。…でも、前九年の役の軍記物語が書かれたのなら、もう一つの後三年の役の軍記物語は書かれていないのか、って思うよね。後三年の役に関しては、軍記物語ではないんだけど、後の南北朝時代に『後三年合戦絵巻』というものがある。この『後三年合戦絵巻』は、難関私大で出題されることがあるので気をつけておきたい。何でか？よく、この『後三年合戦絵巻』は鎌倉文化のところでは教えるんだけど、実は成立時期は1347年だから南北朝時代に当たるんだよね。だから、いろいろ絵巻物を選択肢に用意して「最も成立時期が遅いものはどれか？」なんてやってくるんだ。

さて、武士が勢力を伸ばし「武者の世」となってくる中で、一方の公家は、貴族社会の退潮を自覚するようになる。そうすると、「あ～、昔はよかったな～」と、過去の華やかな栄光を懐かしむようになる。そのため、こうした歴史意識に基づいて、今までの『源氏物語』のような物語文学とは違った、新たな歴史物語が描かれるようになる。それが、赤染衛門あかぞめ(女性)が書いたといわれる藤原道長の栄華を賛美した『栄華(花)物語』や、藤原道長の栄華に批判的な『大鏡』だ。

『栄華物語』は藤原道長の全盛を称えることで、華やかな宮廷生活が感傷的に描かれている。『大鏡』も、道長の権勢とその由来を中心に描いた歴史物語。でも、『栄華物語』とは違って、大宅世継おおやけのよつぎと夏山繁樹なつやまじげという二人の老人に若侍が加わって、人々の前で語る構成で、撰関政治に対する批判精神がみえる。ちなみに、この『大鏡』以降につくられた『今鏡』『水鏡』『増鏡』をまとめて『四鏡』と言うのは古文でやってるよね。ちなみに成立時期はそれぞれ異なるから、同じ時代だと勘違いしないね。

＜四鏡の覚え方＞

☆「大根水増し」←メジャーすぎな覚え方だけどね

大→大鏡(院政期)／こん→今鏡(鎌倉期)／水→水鏡(鎌倉期)／増し→増鏡(南北朝期)

上でも述べたように、平安後期になると「武者の世」となり、貴族社会は衰退していった。それに伴って、貴族たちは昔の貴族政治の全盛期を振り返るようになっていく。そこで、昔の貴族全盛期の頃の物語や伝説などの説話を集大成しようとしたわけだ。この説話文学として、この時期に編纂されたものが源隆国の著した『今昔物語集』だ。これは本朝(日本)・天竺(インド)・震旦(中国)の3カ国の1000近くの説話を集めたものなんだけど、この『今昔物語集』にどんな内容が載っているか、君たちは学習しているはずなんだ。

例えば、10世紀に国司として信濃国に赴いた藤原陳忠という人物がいたよね。その彼の有名な話がこれだ。

「藤原陳忠は、信濃守の任期を終えて京へ帰還しようとしていた。ところが信濃の国境を過ぎるとき、乗っている馬が橋を踏み外し、馬ごと深い谷へ転落してしまった。周りの随行者たちが谷を見下ろすと、とても生存しているようには思われなかった。しかし、谷底から陳忠の「かごに縄をつけて降ろせ」との声が聞こえたので、かごを降ろしてみた。すると、引き上げてみると、かごには陳忠ではなく平茸が満載されていた。再度かごを降ろし、引き上げると今度こそ陳忠がかごに乗っていたが、片手に一杯の平茸を掴んでいる。随行者たちが安心し、かつ呆れていると、陳忠は「転落途中に木に引っかかってみれば、すぐそばにヒラタケがたくさん生えているではないか。宝の山に入って手ぶらで出てくるのは悔やみきれない。『受領は倒れるところに土をつかめ』と言うではないか。」と言いつつ放った。」

これは、まさに貴族全盛期の頃を扱った内容で、この内容が『今昔物語集』に記されているわけだ。ちなみに『今昔物語』にしないように気をつけてね。ちゃんと“集”を入れないとダメだよ。

一方、この時期になると徐々に庶民の中でも文化というのが形成されていく。でも、基本的に庶民の文化といたら「歌う」と「踊る」ぐらいしかない。君ら高校生(高卒生)も遊ぶとしたら、カラオケとかしかないでしょ？だから、この時代でも歌謡といって民間で流行っている音楽がある。んで、この当時流行っていた現代歌謡のことを今様とって、ちょっと前の古代歌謡のことを催馬楽というんだ。これらは、はじめ白拍子(歌舞を舞う遊女)の間で歌われていたんだけど、その遊女と戯れる貴族社会にも流行していったんだ。こうした当時流行っていた今様・催馬楽を集めて後白河法皇がつくったヒットソング集みたいなものが『梁塵秘抄』だ。でも、「何で後白河法皇みたいなトップの人が、そんな庶民の歌を知ってるの？」って気になるよね。でも、それは簡単なことで、法皇自身も白拍子から習ったからなんだ。

☑ 今様『梁塵秘抄』 by 後白河法皇

仏は常に在せども、現ならぬぞあはれなる、人の音せぬ暁に、仄かに夢に見えたまふ。

(訳①…阿弥陀如来さまは、不滅なものとしていつも存在するのだが、目に見えないことが、尊いのだ。人の物音のしないような静かな暁には、かすかに夢の中に姿を見せてくださいます。

(訳②…阿弥陀如来さまは、いつも私たちの身近にいらっしゃってくださるのですが、私には迷いが多いので、お姿を見ることができません。たまたま一人で眠った夜の暁などには、夢の中で、かすかにお会いすることができますが。

遊びをせむとや生まれけむ、戯れせむとや生まれけむ、
遊ぶ子供の声聞けば、我が身さへこそ動かるれ。

(訳①…私たちは遊びをしようとしてこの世に生まれてきたのだろうか？それとも戯れをしようとしてこの世に生まれてきたのだろうか？無心に遊んでいる子供たちの声を聞いていると、自分の体も自然と動き出すように思われる。

(訳②…私は、このように「遊女」として遊び戯れるために生まれてきたのだろうか？今、部屋外の路地あたりから聞こえてくる無心な子供たちの声を聞いていると、私の境遇や過ぎ来し方が、悔恨を伴って身を震わせることだ。)

[文化史⑦－鎌倉文化(鎌倉時代の文化)－]

[A] 建築

さて、鎌倉時代の文化に入っていきたいんだけど、この鎌倉時代が成立する上で、最も重要なのが治承・寿永の乱(源平合戦)だ。これは源氏と平氏が争った戦いとして有名だけど、少しその源平合戦の頃の話をしよう。

そもそも源平合戦に火がついたのは、平氏の専制によるものだったよね。平氏が強大な権力を握って、最終的には1179年に平清盛が後白河法皇を鳥羽殿に幽閉してしまうなんて事態に発展してしまった。そのため、これに怒った後白河法皇の皇子である以仁王は「平氏を倒せ〜」という令旨(皇族からの命令文書)を全国に送ったわけだ。そして、これに呼応した源頼政らが挙兵して以仁王と共に戦ったんだけど、あえなく彼らはやられてしまった。

でも、この源頼政だけじゃなく、以仁王の令旨は全国に送られていたから、木曾の源義仲や伊豆の源頼朝なんかも立ち上がることになった。そして同じく、平氏の専制に対して不満を持っていた南都の東大寺や興福寺の僧兵たちも立ち上がったんだ。ところが、調子に乗って兵を挙げてみたら、すぐに以仁王たちは倒されてしまった。僧兵たちからすれば「…あれれれれ。話が違うよ。…やべえよ、これ」って感じだ。当然、以仁王らを倒した後、平氏は反撃にくるよね…。でも「えっへっへ…。ごめんさない…」じゃ済まされない。平氏はもうプンプンだからね。そして、怒れる平重衡(清盛の子)によって、東大寺と興福寺は焼打ちされちゃったんだ(これを南都焼打ちという)。

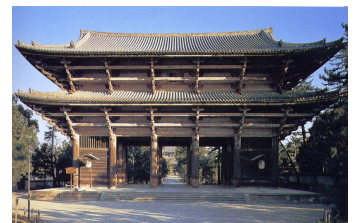
あの東大寺がなくなってしまったというのは、文化的な大打撃だ。そこで、治承・寿永の乱が終わった後、源頼朝により「東大寺を建て直そう〜」という東大寺再建事業が始まったんだ。その東大寺再建のためのトップである勸進職に選ばれたのが重源(俊乗坊)っていう坊さんだ。そして、彼の尽力によって、1195年に大仏再建供養が行われて、ようやく東大寺の大仏は元の姿を取り戻したんだ。そのため、東大寺には右の写真のように重源上人像が祀られている。

なお、重源は、大仏を再建するために、宋の工人で日本にやってきていた陳和卿にもその協力を求めている。そして、この陳和卿は大仏の首を修復しただけじゃなく、3代将軍源実朝の命令で渡宋用の大船を建造しているんだ。ちなみに、なぜ実朝がそんな命令を陳和卿に命じたのかというと、実はこの実朝君は学問のため宋に渡ろうと考えていたからなんだ。まあ、その詳しい理由は後々出てくるけど、実朝って和歌の名人でもあり、かなりの学問オタクだったからね。そして、その船がようやく完成して、後はその進水式。実朝も「さあ〜、進水式だ〜」って期待ワクワクだったんだけど、いざその船を浮かべてみたら、進水できずに沈んでいっちゃったんだってさ。実朝もちょっと可愛そうだよ。

さて、話を戻そう。この東大寺を再建するわけだから、各建築物も再建されることになる。その中の東大寺南大門を建築するにあたって用いられたのが大仏様(天竺様)という建築様式だ。これは宋の建築様式の一つで、天井を張らないのが特徴だったんだけど、屋根はあっても天井がないって何か落ち着かないよね。だから、この東大寺に採用された後はあまり流行らず。逆に、同じく宋から入ってきた禅宗様(唐様)っていう建築様式の方が、簡素で素朴な感じが禅寺に受けて流行っていったんだ。禅宗様っていうんだから、これを採用した代表的な建築物も禅寺関係で、円覚寺舍利殿が有名だ。なお、円覚寺ってのは、北条時宗の招きで来日した無学祖元が建立した禅宗の臨済宗の寺院だったよね。



[東大寺重源上人像]



[東大寺南大門] by 大仏様



[円覚寺舍利殿] by 禅宗様

鎌倉時代には、宋からこういった新しい建築様式が入ってきたんだけど、もちろん平安時代からの日本の伝統的な建築様式もある。それが和様という建築様式で、有名なのが蓮華王院本堂(三十三間堂ともいう)だ。この蓮華王院本堂は、後白河法皇の命令で平清盛が1164年に創建したものなんだけど、「じゃあ、鎌倉文化じゃなくて院政期文化じゃん！」って思う子がいるよね？残念ながら、この蓮華王院本堂は、鎌倉時代に焼失してしまっていて、1264年に再建されているんだ。そして、その再建時の建築様式が和様だから、この鎌倉文化で問われてくるわけだ。なお、余談だけど、この蓮華王院本堂(三十三間堂)で、毎年成人式に行われる儀式を知ってる？毎年成人の日になると、弓道をやっている新成人の女性たちが60m(約三十三間)の距離を弓矢で射る「通し矢」という儀式が行われるんだ。『こち亀』を読んでいる子は磯鷲早矢が参加した儀式と気づくかもね(笑)。ただし、建物の長さが三十三間(約60m)あるから、三十三間堂という風に教える人がいるけど、それは誤り。実際の建物の長さは120mあるし、そもそも三十三間の「間」って長さの「間」ではなく、お堂内の柱間が33あるという建築用語の「間」からきているしね。なお、その他の和様建築としては、石山寺多宝塔や秋篠寺本堂、興福寺北円堂が有名だけど、この辺は文化史大好きクソ上智用の知識だから、受けない子は放っておいていい。



〔蓮華王院本堂(三十三間堂)〕 by 和様



〔観心寺金堂〕 by 折衷様

一方、この和様に、新しく入ってきた大仏様・禅宗様を取り入れたのが折衷様で、その代表的な建築物が観心寺金堂だ。なお、「折衷」とは「あれこれいろんなものから適当なものをとってくる」という意味。つまり、和様も大仏様も禅宗様も、全部いいところを取ってきちゃえ様式ってこと。まあ、日本風と西洋風の様式を組み合わせた「和洋折衷」の折衷と同じ意味なわけだね。

…でも、ずいぶん建築物と建築様式が多いよね。しかも、それぞれ建築様式が違うんじゃないかと思えない。そこで、以下のゴロで覚えておこう。ちなみに、このゴロで出てくる「カラ館」というのは「カラオケ館」の略だ。

＜鎌倉文化の建築物の覚え方＞

- ☆「東大ってじゃ〜んぜん(全然)カラ館設置されんわ」
- 東→東大寺南大門／大→大仏様／てじ→天竺様
- え〜ん→円覚寺舍利殿／ぜん→禅宗様／カラ→唐様
- 館→観心寺金堂／設置→折衷様
- れん→蓮華王院本堂／わ→和様



〔武士の館〕 in 『一遍上人絵伝』

なお、右の写真は『一遍上人絵伝』における武士の館を描いた様子。昔は平安時代の貴族の邸宅である寝殿造とはまったく違う様式の武家造と言われていたんだけど、現在では寝殿造を簡略化した様式だということがわかり入試では問われなくなった語句だ。

[B] 彫刻

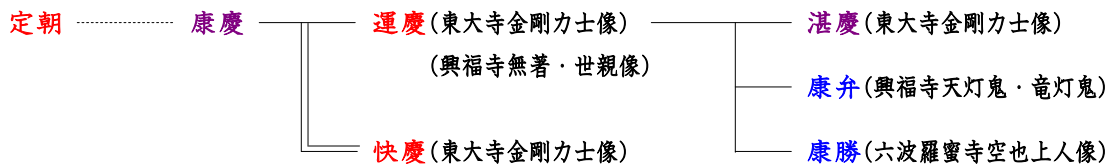
さて、彫刻に入っていこう。やっぱり、この鎌倉文化の背景となっているのは仏教思想だ。ほら、国風文化のところで、末法思想の話をしたけど、1052年からはずっと末法の世でしょ？だから、この時代も当然、末法の世であり、武士も不安になってきて仏教にすがりたいんだ。でも、この時代の武士には教養があまりなくて文字も読めない人が多い…。そこで、彫刻とかいった形而下(形あるもの)のものをみることで、仏教を理解しようとしたんだ。だから、この時代は彫刻美術が数多く造られている。

その中の一つが先ほど建築のところでやった東大寺南大門にある**東大寺南大門金剛力士像**だ。これは、東大寺南大門の入り口のところの両脇にそれぞれ二体立っている。正にこれこそ武士の気風が表れているものといえるよね。ちなみに、どうでもいいんだけど、この二体にはそれぞれ名前がついていて、左の口を「あ〜」と開けているのが阿形で、右の口を「ん〜」と閉じているのが吽形なんだ。この2つは、8mを越える大作で、小学校でも習った**運慶**やその子**湛慶**、弟子の**快慶**ら、**慶派**(**奈良仏師**)の一派が総出して70日足らずで制作しちゃったんだって。すごいよね。ちなみに、慶派というのは、運慶とか快慶とか“慶”がつく彼ら彫刻師の一派のことで、まあ、彫刻界のエリート達のことだ。しかも、あの国風文化期に寄木造を始めた**定朝**の流れを組んでいるんだよ。ちなみに下にその慶派の系図と、その作品名を載せておくけど、そりゃ、層々たる顔ぶれだ。ただ、快慶は弟子であるだけで、血が繋がってないから気をつけてね。



〔東大寺南大門金剛力士像〕 by 慶派一派

< 慶派の系譜 >



〔東大寺僧形八幡神像〕 by 快慶

でも、こいつら慶派の連中がこの東大寺南大門金剛力士像だけ造って終わるわけないよね。当然、他にもいろいろ作品を作っているんだ。例えば、同じ東大寺には、**快慶**のつくった**東大寺僧形八幡神像**がある。この“僧形八幡神像”ってどっかで聞いた覚えがないかな？…弘仁・貞観文化のところで、神道と仏教を同一視する神仏習合の影響から**薬師寺僧形八幡神像**というものが作られていたよね。これは僧の形をした八幡神という神様を示したもので、薬師寺に造られたものだけど、東大寺でもそれとは別に八幡神像が造られたということだ。ちなみに、この神仏習合に関して、以下の内容にまとめておいた。

〔神仏習合〕

神仏習合に関して、詳しくは弘仁・貞観文化のところで説明したけど、これは神道と仏教を同一視するものだったよね。神道は日本古来の宗教で、仏教はインドから始まり日本に伝わった世界宗教だったけど、二つとも同じように考えてしまうというものだ。具体的に言うと、神道の信仰すべき神様と、仏教の信仰すべき仏様も同じものだと考えること。そうした中で平安時代から考えられていたのが**本地垂迹説**というものだった。これはどういうものかと言うと、仏が本物(本地)で、神様は人の前に姿を現す時の仮の姿(垂迹)だという考え方なんだ。例えば仏教の「**大日如来**」こそが本物の姿(本地)で、神道の「**天照大神**」はその「大日如来」が姿を変えた仮の姿(垂迹)だと考えるわけだ。

ところが、神道側からしてみれば「何でやねん！何で、神様の方が仮の姿やねん！神様の方が本物にすべきやろ！」って感じだよ。そのため、鎌倉時代から神道側からの反発があって、**元寇**で神風が吹いたという神国思想を背景に、神が本物(本地)で、仏は仮の姿(垂迹)であるとする反本地垂迹説(神本仏迹説)が唱えられるようになったんだ。これを主張したのが、伊勢神宮の外宮の神主だった**度会家行**で、彼が著したのが『**類聚神祇本源**』。“度”を“渡”にしないように気をつけてね。これによって、鎌倉時代からは反本地垂迹説が通説になっていって、彼の神道一派のことを**伊勢神道**又は**度会神道**なんて言うんだ。

一方で運慶らのつくった興福寺無著・世親像を見て欲しい。これは左が無著で、右が世親なんだ。「……って、どっちがどっちか区別つかねーよ。」……ですよね〜（笑）。そう、実はこの2人兄弟で、もともとこれはインドのガンダーラ地方に生まれた法相宗の祖と仰がれた無著・世親っていう兄弟なんだ。法相宗の祖であるから、この仏像も法相宗の中心寺院である興福寺にあるわけだ。天平文化の南都六宗で学習したけど、興福寺は法相宗を研究する学問研究グループだったよね。

でも、興福寺の仏像だったら、僕は康弁のつくった興福寺天灯鬼・竜灯鬼の方が好きだね。写真を見てみよう。こいつらは想像上の鬼なんだけど、何かとってもユーモラスな雰囲気があるね……と、というのが普通の説明。そんな誰でも言えそうな説明じゃ、根本式講義は成り立たない。…写真を見てもらうとわかるんだけど、この鬼たち妙に生意気そうな顔してるでしょ？何か、「オス！オラ天灯鬼，オラ竜灯鬼！」（孫悟空風）みたいに威張ってる感じだよね。でも、いばっていても今の不況の世の中じゃ、こいつらも生活していけない。ご飯が食べたくても、今の“世の中は金だから”ご飯も食べることが出来ない。鬼だって金がなかったら生活していけないのだ。…そこで、二人はラーメン屋の出前のバイトで生計を立てていくことに決めたんだ。さて、出前の注文が入って初めての配達だ！やっぱ、ここはカッコ良く「出前行ってきやーす！」って担がなきゃ！その勢いよく天灯鬼が出前を持ち上げた場面が、左側の天灯鬼の写真だ。

そして、竜灯鬼も一緒に出前に行ったんだけど、困ったことに途中道がわからなくなっちゃったんだ。その「う〜ん、どっちに行こうかな〜」って出前を頭に乗けて考え事しているのが竜灯鬼だ。すんげえ、この竜灯鬼悩んでるでしょ、やっぱ道がわからないんだよね。

さて、じゃあこのラーメンを誰が注文したのかというと、六波羅蜜寺で腹を空かせてまっていた空也くんだったんだ。ろくはらで、はらが空腹な空也が待っていたわけだね。「おせ〜な〜、まだかよ！念仏でも唱えるぞ、このやろう！」って待っていたところに、やっとのことで「へい、お待ち〜！」って竜灯鬼が届けにきたんだ！「待ってました〜」って食べ始めたんだけど、さっき竜灯鬼のやつ道に迷ってたでしょ？だから、麺がもう伸びきっちゃってたんだよね。こいつを食ったもんだから空也くんも「おえ〜〜！！」って吐き出しちゃったんだ。その決定的瞬間を像にしたのが、康勝のつくった六波羅蜜寺空也上人像だ。これは吐いた時の表情を見事にとらえている。ちなみに“蜜”っていう字を“密”に間違える人多いから気をつけてね。

もちろん今までの話は嘘だらけだ。ただ、根本式の流れはつかめたと思う。本当はこの空也が口から出しているのはラーメンの麺なんかじゃなくて「南無阿弥陀仏」っていう言葉なんだ。実は、空也には可愛がっていた鹿がいたんだけど、そいつが死んでしまった。そこでとっても悲しんだ彼は、その鹿の角を杖につけて、なおかつその鹿の皮を身にまとして念仏を唱えながら歩き回ったそうなんだ。そし

お前等似すぎ！
…って兄弟か…



〔興福寺無著・世親像〕 by 運慶

オス！ラーメンー丁
出前行ってきやす！



〔興福寺天灯鬼(左)・竜灯鬼(右)〕 by 康弁

やべ…
道が
わかん
ねえ…

ラーメン
まだあ？
……
おえ〜〜
〜！！

鹿の角を
杖につける



タケコフター？

〔六波羅蜜寺空也上人像〕 by 康勝

て、その空也が「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えると、その一言が口から出てきたというそう。まあ、ラーメンが口から出ようが、念仏が口から出てこようがキモイことには変わらないけどね。

ところで、今やった興福寺天灯鬼・竜灯鬼(康弁)と六波羅蜜寺空也上人像(康勝)の制作者は混乱しやすい。どっちがどっちなんだ～ってなってしまう。そこで、この空也上人の方を以下のように覚えておけばいい。

＜慶派一派の作品の覚え方＞

☆康勝と空也上人像は“勝(しょう)”と“上(しょう)”でつなげる

こうした彫刻の世界では慶派が活躍していたんだけど、中にはこの慶派に属さないで活躍した仏像彫刻師によって制作された彫刻もある。それが鎌倉にある**明月院上杉重房像**だ。この制作者はわかっていないんだけど、上杉ってのもピンと来た子もいるんじゃないかな？そう、この人は、後に室町幕府の関東管領に就任した上杉氏の祖となった人なんだ。まあ、余裕があったら覚えておく程度でいいけどね。



〔名月院上杉重房像〕

〔C〕 絵画

鎌倉時代の絵画に関しては基本的には大きく二つに分類することができる。それが肖像画と絵巻物だ。この二つから、また細かく分類できるんだけど、まずは下のまとめを見てみよう。

＜鎌倉時代の絵画＞

- 肖像画 — 似 絵…禅宗以外の人物の肖像画
- 頂 相…禅宗の修行僧が一人前になった時に、師匠から与えられる師匠の肖像画
- 絵巻物 — 縁起物…寺社の由来を描いたもの
- 伝記物…高僧の生涯を描いたもの
- 合戦物…兵乱や武士を題材としたもの
- 六道絵…天上・人間・地獄・餓鬼・畜生・修羅の6つの世界の有様を描いたもの

細かい内容に関しては、それぞれ触れていくので、じゃあまずは肖像画の方から見ていこう。そもそも肖像画は**似絵**と**頂相**の二つに分けられるんだ。この似絵って言うのは大和絵の一種で、文字通り“本人に似せて描く肖像画のこと”だ。「えっ？…そんなの肖像画なんだから当たり前じゃん」…って NoNoNo…。実はそれまでの大和絵っていうものは特に本人に似せて描いていたわけではないんだ。しかも、それは本人を見ないで描くことが多かった。ほら、院政期文化の『源氏物語絵巻』とかでもそうだったけど、みんな引目鉤鼻で描かれて同じような顔をしてたでしょ？右の写真を見てもわかるけど、こんなの小学生でも描けるレベルだよ。つまり、平安時代までの絵画における人物の肖像画なんて、お子ちゃまレベルのものでしかなかったわけだ。



その後、鎌倉時代に画期的なものとして登場したのが**似絵**だ。この似絵はちゃんと本人を目の前にして描くものだったから、今までの大和絵とは違って写実的に描かれているというのが特徴。そして、その似絵の代表的な絵師が**藤原隆信**・**信実**父子だ。

＜似絵の絵師…藤原隆信(父)・信実(子)・専阿弥陀仏(孫)＞

- 藤原隆信**(父) 『(伝)源頼朝像』・『(伝)平重盛像』
- 藤原信実**(子) 『後鳥羽上皇像』
- 専阿弥陀仏**(孫) 『親鸞聖人像』(鏡の御影)

この藤原隆信が描いたと言われているのが『(伝)源頼朝像』と『(伝)平重盛像』なんだけど、「おい、(伝)って何だよ！」って気になるよね。実は、近年になってこの二つは足利直義と足利尊氏なんじゃないかっていう新しい説が発表されて、こっちの説の方が有力になってきているんだ。もし、直義と尊氏であったとすると、時代から考えて作者も藤原隆信ではなくなってしまうよね。だから、この二つは今非常に問題に出しづらいんだ。



足利直義か？

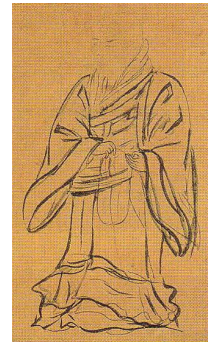
〔(伝)源頼朝像〕

この隆信の子の藤原信実も『後鳥羽上皇像』を描いているんだけど、これは後鳥羽上皇が、承久の乱を起こす前に描かせたものなんだ。まあ、結果的には後鳥羽上皇は敗れて、隠岐に流されることになっちゃうわけだけどね。そして、この信実の子の専阿弥陀仏もやっぱり同じ家系だから似絵を描いている。それが親鸞を描いた『親鸞聖人像』だ。これは、モデルの親鸞自身がこれを見てソックリだって言ったことから「鏡の御影」とも呼ばれているんだ。



〔後鳥羽上皇像〕

by 藤原信実



〔親鸞聖人像〕

by 専阿弥陀仏

一方、華嚴宗を復興させた明恵(高弁)が、松林の樹の上で坐禅を組んで、修行をしている様子を描いたのが『明恵上人樹上坐禅図』だ。これは、明恵の弟子である成忍が書いたといわれていて、華嚴宗の中心寺院である高山寺に所蔵されている。



うひゃひゃ！
たまんねえな
こりゃ

〔明恵上人樹上坐禅図〕

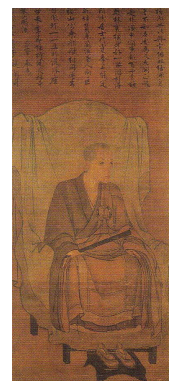
by 成忍

でも、何でわざわざこの明恵上人は樹の上で坐禅なんかしているのか、僕は長年ずっと疑問に思ってきた。でも、ついにこの謎が解けたんだ。

おそらく、明恵上人はノリで、樹の上で坐禅を試みたのだ。そうしたら、樹の上から美女が着替えをしているところが見えたのである。だから、もうたまんないし、降りたらもったいない。しかも、ずっと見ていたものだから、ちょっとあそこが大きくなってきちゃって、立ち上がるとバレてしまう。だから、ずっと彼は前かがみの姿勢を続けているわけだ。そう、これで謎は全て解けたね？明恵上人は坐禅のために手を組んでいるのではない。彼の手がどこにあるのか見てほしい。ほら、彼の手は大きくなってしまったおちんちんを抑えているでしょ。これが明恵上人が樹の上で坐禅を組んでいた真相だ。…苦情はいつさい受け付けませんよ(笑)。

まあ、樹の上で坐禅していたわけだけど、本当は、どうやら樹の上だけでなく石の上とかでも構わなかったらしいよ。とにかく、その高山寺のまわりにある石や樹の上で、明恵上人が坐禅しなかった石はない、というくらい片っ端から坐禅したそう。おそらく自然の中で坐禅することで精神を落ち着かせようとしたんだろうね(by 高山寺に電話して坊主から直接聞きました)。

これで似絵は終了。こういった似絵に対して、頂相とは禅宗の坊主の間で始まった肖像画で、師匠が一人前になって自分から巣立っていく自分の弟子に与えた自分の肖像画のことなんだ。そして、その弟子はその頂相を見て師匠を思い浮かべ、「あ～～、師匠最高っすわ～～。もう我慢できませんわ～」って師の教えに思いをはせるというものなんだ。…かなり脚色してるけど、実にキモイ感じムンムンだよね。ところで、「あれ、じゃあ『明恵上人樹上坐禅図』は頂相じゃないの？」って思った人もいないかな？確かにそう思った人もいそうだよ。でも、頂相はあくまでも禅宗のものだとさっき述べたよね。だから、明恵は禅宗ではないので頂相には含まれないんだ。つまり、頂相であるか、似絵であるかの違いは禅宗であるか、ないかってことになるわけだ。

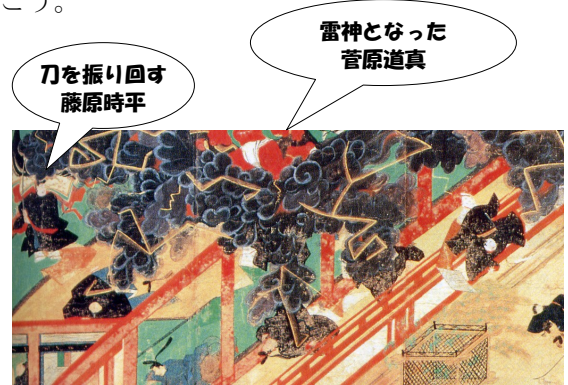


〔頂相〕

(蘭溪道隆像)

さて、肖像画は終了したので次は絵巻物に移っていこう。この絵巻物っていうのは院政期文化のところでも出てきたけど、文章と絵を組み合わせたものだったね。この時代の庶民とか武士は文字が読めなかったんだけど、絵巻物なら絵を見ていけば大体わかるっていうことで、彼らに歓迎されたんだ。だから、この鎌倉時代には多くの絵巻物が描かれている。これらはいろいろあるんだけど、大きくジャンル別に分けると、寺社の由来をテーマにした縁起物と、高僧の一生を描いた伝記物、戦や武士をテーマにした合戦物に分けることが出来る。まあ、ぶっちゃけそんな区別は覚える必要はないんだけどね。じゃあ、鎌倉時代にできた絵巻物にどんなものがあるか見ていこう。

「学問の神」とも言われた菅原道真は901年、藤原時平の讒言によって大宰府に左遷されてしまい、その2年後、失意のうち彼はその地で死んでしまった。そして、彼の死後、京都で天変地異などが相次いだため、道真は怨霊として恐れられたというのは知ってるよね。そこで、彼の怨霊を鎮めるために建立された寺院が、京都の北野神社で、この神社の由来と、菅原道真の生涯を描いた絵巻物が藤原信実の『北野天神縁起絵巻』だ。内容は平安時代だけど、描かれたのは鎌倉時代になっているから気をつけてね。ちなみに、この絵の場面は、道真の怨霊が雷神となって、藤原時平を襲っている場面。まわりの人たちは逃げ回っているけど、必死に刀を振り回している時平もおもしろいよね。刀なんか振り回したら、逆に雷に打たれちゃうんじゃないかね？



〔北野天神縁起絵巻〕

それから、同じく縁起物(寺院や神社の創立の由来)として描かれたのが『粉河寺縁起絵巻』と『石山寺縁起絵巻』だ。これらは、それぞれ粉河寺と石山寺の創立の由来を記したものだけど、まったく聞かれない。そもそも「粉河寺・石山寺の由来を書いた絵巻物は何か？」



〔石山寺縁起絵巻〕

答えは『粉河寺縁起絵巻』・『石山寺縁起絵巻』なんて問題はつくれないでしょ？だから、これらは「鎌倉文化の時期に成立したものを選べ」という時期を問う問題ぐらいしかないんだ。

もう一つの縁起物として、この時期に描かれたものが、高階隆兼の描いた『春日権現験記』だ。これは、春日明神(神道の神)の霊験譚を集め、その春日明神を祀る春日神社に奉納されたもの。



〔春日権現験記〕 by 高階隆兼

この鎌倉時代になると手工業が発達して行って、次第に手工業者といった職人たちが出てきた。その職人達による建築現場の様子が、この『春日権現験記』に描かれているんだ。だから、当時の手工業の発達を示す史料としても重要なわけだ。



〔一遍上人絵伝〕 by 円伊
—備前国福岡市の様子—

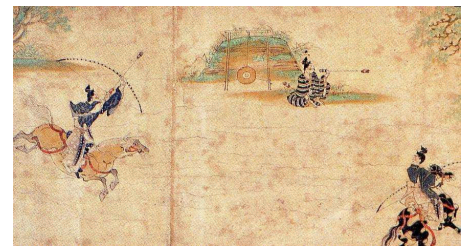
一方で、高僧の生涯を描いた伝記物には土佐吉光が描いたと言われる『法然上人絵伝』があるけど、これはかなり頻度が低い。これも法然の生涯を描いただけのものだから、そのまま出題するのは困難でしょ？ただ、一方で一遍の弟子の円伊が描いた『一遍上人絵伝』だけは絶対に外せない。「でも、それだって一遍の名前が入っているから問題に出しづらいんじゃないの？」…いやいやいや。この一遍って坊主は、布教のため、全国を行脚していたでしょ？だから、全国いろんなところを回ってまわっているから、それぞれその土地の様子とかが絵巻物に描かれているんだ。その絵巻物の中で有名な場面の一つが、備前国の福岡市の様子を描いたものだ。この絵巻物の様子から、当時の市場の状況などがわか

るんだ。ただし、難関私大になると、問題をこう換えてくる。「これは福岡の市の様子を記したものが、これは今の何県にあたるか？」…こうすると、君たちは「福岡だから、福岡県！」って単純な解答を書くでしょ？これは、君たちがそう書くのを期待して、わざと現在の県名で聞くんだよ。答えは岡山県。備前国は今現在の岡山県にあたる。

その一方で、当時の武士や合戦の様子を記した合戦物が、『蒙古襲来絵詞(蒙古襲来絵巻)』と『男衾三郎絵巻』だ。前者は元寇の際に奮戦した肥後国の御家人竹崎季長が、自分の武功を子孫に伝えるために描かせたもの。この『蒙古襲来絵巻』から、集団戦法や「てつほう」という火薬を利用した元の戦法が読み取れるよね。一方、後者の『男衾三郎絵巻』は武蔵国の武士の兄弟の物語を描いたもの。特に、この絵巻物には当時の武士の生活の様子が描かれていて、騎射三物の一つである笠懸(走っている馬上からの的を射る競技)の様子が描かれているんだ。



〔蒙古襲来絵巻〕—肥後国の御家人竹崎季長の奮戦—



〔男衾三郎絵巻〕—笠懸の様子—

こうした合戦絵巻には平治の乱を題材にした『平治物語絵巻』や、後三年の役を題材にした『後三年合戦絵巻』(成立したのは1347年の南北朝文化の時期)もあるけど、これらはよっぽど暇だったら覚える程度で構わない。後者の『後三年合戦絵巻』には、大江匡房から『孫氏』の兵法を学んだ源義家が、飛んでいる雁の群れが乱れたことから、その下方に敵の伏兵が潜んでいることに気づくという有名な場面が描かれている。なお、この『後三年合戦絵巻』



〔後三年合戦絵巻〕

には、捕らえられた武者の舌を抜くなど、生々しい戦闘の残酷な場面が、冷徹な態度で描かれているのが特色なんだけど、これは六道絵の意図と重なり合うとする見方がある。「…って、そもそも六道絵って何だよ？」って感じだよ。そもそも、六道というのは人間が生まれ変わって住むことになるという、人間・天上・地獄・餓鬼・畜生・修羅の6つの世界のことを言う。まあ、具体的に言うと、君たちが何かしら悪いことをして死んだ場合、その人は人間世界から地獄世界や、餓鬼世界などで住むようになるという、仏教に基づく考えのこと。こうした六道の様子を記したものが『地獄草子』・『餓鬼草子』、そして六道の一環として、病で苦しむ人々の姿を描いた『病草子』だ。これらは院政期～鎌倉時代初期に描かれたんだけど、その背景には、末法の世の中で、源平合戦など激動する現実不安になっていく民衆の心情がある。つまり、末法の世に対し不安を持つようになったことで、地獄や餓鬼、病などグロテスクな世界にも目が向くようになり、そうした世界が描かれたわけだ。なお、ここで出てきた『地獄草子』や『餓鬼草子』・『病草子』、そして『平治物語絵巻』や『後三年合戦絵巻』の出題率は非常に低い。「〇〇文化の時期に成立した作品として正しいものはどれか？」といった時期判定問題の選択肢に入っていたりするものなので、文化史の難しい難関私大(上智・法政など)ぐらいしか必要ない知識だね。



〔餓鬼草子〕

のこと。こうした六道の様子を記したものが『地獄草子』・『餓鬼草子』、そして六道の一環として、病で苦しむ人々の姿を描いた『病草子』だ。これらは院政期～鎌倉時代初期に描かれたんだけど、その背景には、末法の世の中で、源平合戦など激動する現実不安になっていく民衆の心情がある。つまり、末法の世に対し不安を持つようになったことで、地獄や餓鬼、病などグロテスクな世界にも目が向くようになり、そうした世界が描かれたわけだ。なお、ここで出てきた『地獄草子』や『餓鬼草子』・『病草子』、そして『平治物語絵巻』や『後三年合戦絵巻』の出題率は非常に低い。「〇〇文化の時期に成立した作品として正しいものはどれか？」といった時期判定問題の選択肢に入っていたりするものなので、文化史の難しい難関私大(上智・法政など)ぐらいしか必要ない知識だね。

う～ん，でもこの鎌倉時代の絵巻物も種類が多いよね。しかも，これは院政期文化の絵巻物と対比させて問題を作ってくるんだ。そのため，院政期文化の絵巻物と鎌倉時代の絵巻物を区別できるようにしなければならない。

＜院政期文化と鎌倉文化の絵巻物＞	
＜院政期文化の絵巻物＞	＜鎌倉文化の絵巻物＞
『源氏物語絵巻』	『北野天神縁起絵巻』
『伴大納言絵巻』	『粉河寺縁起絵巻』
『鳥獣戯画』	『石山寺縁起絵巻』
『信貴山縁起絵巻』	『春日権現験記』
	縁起物
	『法然上人絵伝』
	『一遍上人絵伝』
	『蒙古襲来絵巻』
	『男衾三郎絵巻』
	伝記物
	合戦物

院政期文化の絵巻物の覚え方は「変人番長失禁さ」と既に記したけど，鎌倉時代の絵巻物の覚え方もゴロで覚えておこう。ただし，早慶レベルのものは外してあるけどね。

＜鎌倉文化の絵巻物の覚え方＞
☆「大ブス・カスがもう一遍、来た」
大ブス→男衾三郎絵巻／カスが→春日権現験記／もう→蒙古襲来絵巻
一遍→一遍上人絵伝／来た→北野天神絵巻

[D] 工芸・書道

鎌倉時代というのは武士が勢力を持っていた時代だから，当然戦が多くなる。ゆえに武士の中でも刀剣とか甲冑(兜・鎧の総称)といった武具の需要が高まる。需要が高まれば，当然供給も高まるよね。そのため，供給する立場である工人の中でも，名工と呼ばれる名人達が登場していく。例えば，刀剣では京都の粟田口吉光，備前では長船長光，鎌倉では岡崎正宗，といった名工が出たり，甲冑では明珍家の人々が多くの名作を作っていたんだ(明珍かっちゅう(甲冑)ねん！って感じで覚えておこう…)。でも，名工の人物はどうせどこの誰だか混乱するんでしょ？だから，ゴロで覚えてしまおう。想像力豊かな人には高度な下ネタとして拍手喝采を頂けるんじゃないだろうか(笑)？

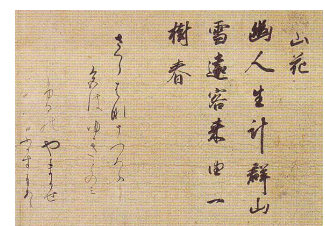
＜刀剣の名工の覚え方＞
☆「今日はあわびでオッサン構おうか？」
今日→京都／あわ→粟田口吉光 び→備前／オッサン→長船長光
かま→鎌倉／おうか→岡崎正宗



〔瀬戸焼〕

前時代から引き続き，農業技術の発達に伴い農村が興隆したため，農民など一般庶民も陶器を使うようになった。需要が増えれば，当然その量産化がはかれるよね。そのため，平安時代後期以降，東海・北陸・西日本の各地で陶磁器産業が盛んになったんだ。その中で，代表的なものが平安時代後期から続く愛知県知多半島の常滑焼と，鎌倉時代に道元と共に宋に渡り，陶磁器の技術を学び帰国した加藤景正がその技術を用いて尾張で開いたといわれる瀬戸焼だ。

続いて書道のお話。国風文化のところで三蹟という字のうまい三傑を学習したよね。三蹟は小野道風と藤原佐理，そして藤原行成の3人だったね。その一人の藤原行成が創始したのが世尊寺流という書道一派で，これが後の書道の様々な流派の源になっているって説明したと思う。この世尊寺流で書道を学んで，今までの和風的な書式に，唐風の書式を取り入れて青蓮院流という流派を創始したのが皇族の尊円入道親王っていう人なんだ。彼の書いた「鷹巢帖」なんかは有名だね。これ以降，この青蓮院流が他派を圧倒していき，結局世尊寺流の方は後継者がいなくて断絶しちゃうことになるんだ。なお，この青蓮院流は江戸時代になると御家流というものに発展していったけど，余力があったら覚えておく程度で構わない。



〔鷹巢帖〕

[E] 文学・学問

1185年に日本で最初の武家政権である鎌倉幕府が誕生したことで、政権は公家から武家に移っていった。これにより、公家の支配は後退していくこととなったため、「あ〜、昔は良かったのになあ〜。」というように、貴族たちは古き良き時代を懐かしむようになる。それを懐古主義とか言うんだけど、これによって古典を研究したり、朝廷の儀式や先例を研究したりするようになっていったんだ。その中で代表的な学問が有職故実というものだ。これは朝廷の儀式や年中行事を研究するものなんだけど、読み方は“ゆうしょくこじつ”じゃなくて“ゆうそくこじつ”だから気をつけてね。その有職故実で有名なのが順徳天皇の著した『禁秘抄』だ。なお、順徳天皇は、承久の乱によって佐渡に流された人でもあったね。まあ、その時には天皇の位は退いていたので、順徳上皇になるけどね。

この懐古主義により、昔の『日本書紀』や『古事記』などの古典を研究することも盛んになる。こうした古典を研究した古典注釈書が、卜部兼方の『釈日本紀』（日本書紀の注釈書）や、仙覚の『万葉集註釈』（万葉集の注釈書）だ。

公家政権が衰退したことで昔を懐かしむ人もいれば、逆に鎌倉幕府に対して強い対抗意識を持つ人物もいた。それが、この当時“上皇”として院政を行っていた後鳥羽上皇だ。そりゃあ、後鳥羽上皇からしてみれば、東国では鎌倉幕府が主導権を握り政治を行っているわけだから、おもしろくないよね。そのため、後鳥羽上皇は京都朝廷の象徴として、伝統的な貴族文化である和歌を積極的に推進して、その勢力の維持に努めようとしたんだ。そこで、後鳥羽上皇が藤原定家・藤原家隆らに編纂を命じて、1205年に完成した勅撰和歌集が『新古今和歌集』だ。これは天皇自らが選定を命じた勅撰和歌集「八代集」の最後にあたるものだね。すでに国風文化のところで、「八代集」の最初である『古今和歌集』と比べてみせたと思うけど、それぞれ何年に成立し、誰が編纂を命じて、誰が編纂したかを確認しておこう。

＜八代集＞

最初 = 『古今和歌集』 …… 905年(国風文化) / 醍醐天皇の命 / 編者 = 紀貫之・紀友則・凡河内躬恒
最後 = 『新古今和歌集』 …… 1205年(鎌倉文化) / 後鳥羽上皇の命 / 編者 = 藤原定家・藤原家隆

なお、この編者の一人である藤原定家の日記は『名月記』と言うんだけど、この日記の中には、1231年に起きた寛喜の飢饉に関する内容が記されている。今「飢饉なんてどうでもいいじゃねえかよ〜。」って思った人いるでしょ？実はね、最近この飢饉に関する研究は熱心に行われていて、難関私大の入試問題でもちょっとしたブームになっているんだ。少し話が文化史から逸れるけど、飢饉に関する内容を少し述べておこう。

[飢饉の与えた影響]

江戸時代の三大飢饉、享保の飢饉(1732)・天明の飢饉(1782~1787)・天保の飢饉(1833~1836)は有名だよ。これらが当時の社会状況に与えた影響は非常に大きかった。例えば、享保の飢饉(1733)は日本最初の打ちこわしである江戸の打ちこわし(1733)を引きおこしたし、天明の飢饉は天明の打ちこわし(1787)を引きおこし、その後に行われた寛政の改革では飢饉に備えた政策(困米の制・七分積金)が行われた。また、天保の飢饉は1836年の三河国で起きた加茂一揆、甲斐国で起きた郡内騒動(郡内一揆)に影響を与えている。

でも、飢饉が起きるのは当然江戸時代だけじゃない。源平合戦の最中に西日本を中心に起きた養和の飢饉(1181~1182)は、西国を拠点にしていた平氏政権に大きなダメージを与えることになったし、1232年に制定された御成敗式目、寛喜の飢饉(1231)による社会混乱を鎮めるための政策として出された側面も持つ。他にも、室町時代に起きた寛正の飢饉(1459~1460)では8万人近くの死者を出すことになったし、江戸時代の寛永の飢饉(1642)は、田畑勝手作りの禁令(1643)や田畑永代売買の禁令(1643)、その後の幕府・諸藩の農政政策の転換に大きな影響を与えている。ここら辺の内容は早慶上智を受ける場合には特に気をつけておこう。

さて、この藤原定家から和歌を学び、後鳥羽上皇からも寵愛されたのが3代将軍の源実朝だ。彼は3代将軍という地位にはあったものの、実権は母方の執権北条氏に握られて、政治の面からは遠ざけられていた。そうした思いから、彼は和歌などの学問に走り、京文化に強い関心を持っていったんだ。だから、彼の境遇を不憫に思った陳和卿は、学問留学のための渡宋を実朝に勧めたりしたわけだね(最終的には、船が浮かばなくて沈んじゃったって話は建築のところでしたよね)。その後、彼は甥の公暁によって鶴岡八幡宮で殺害されちゃうんだけど、実はその死ぬ日の前に非常に興味深い和歌を詠んでいる。

「いでていなば 主なき宿と なりぬとも 軒ばの梅よ 春をわするな」
 (私が出て行くと、この家は主人の家のいない家になってしまうけれども、
 そうなっても、軒ちかくの梅よ、春がきたら忘れないで、梅を咲かせておくれ)

何か自分の運命を感じているような雰囲気を感じさせる…。そして、将軍であるにもかかわらず実権のない彼の境遇を表している歌だよ。こうした彼の歌を集めた私撰和歌集が『金槐和歌集』だ。特に金槐の“槐”を“塊”にしないように気をつけてね。

こうした源実朝のように武士であっても教養が高い人がいるように、当時は上皇・法皇の警護を行う武士の中にも高い教養をもつ者がいた。それが西行だ。彼はもともと鳥羽法皇に仕えていた北面の武士だったんだけど、世の無常を感じて突如 23歳で妻子も捨てて出家しちゃったんだ。そして、諸国を歩き回っているいろいろな詠んだ歌をまとめたのが『山家集』だ。

＜私撰和歌集＞

『金槐和歌集』(源実朝)…3代将軍であったが実権はなく、格調高い万葉調の歌を詠む
 『山家集』(西行)…北面の武士から出家して隠者となり、諸国をまわって歌を詠む

ちなみに、よく“無常”を“無情”と勘違いしてる人がいるけど全然違うからね。“無常”っていうのは「全てのものは変化していて、永遠に存在するわけではない」という意味のこと。つまり、「常なるものは何もない」とのことだね。でも、「何でこの時代に“無常”を感じるんだよ〜」って思うよね。実は、こうした思想の背景にあるのも、末法思想が影響していたんだ。ほら、たとえ鎌倉時代になろうが、末法の世には変わりはないでしょ？(末法思想でいわれる「末法の世」とは末法元年の1052年からその後の1万年間を指す)。だから、こうした世の中に“無常”を感じて出家したり、隠遁してしまったりするわけだ。こうした西行のように世の中を歩き回ったり、隠遁した人たちを“世捨て人=隠者”なんて言うんだけど、ちょっとそのネーミングはカッコ良すぎだよ。だって、歩き回った人は別にして、隠遁した人って結局は“引きこもり”みたいなもんでしょ。そんな奴等をカッコ良く“世捨て人”なんて言う必要はない。ただの“引きこもり野郎”でいいんだ。

さて、その“引きこもり野郎”の代表者が鎌倉初期に『方丈記』を著した鴨長明と、鎌倉後期に『徒然草』を著した吉田(卜部)兼好だ(それぞれ時期がずれていることにも注意)。『方丈記』は「行ク川ノ流レハ絶エズシテ…」の名文句で始まって、世の無常を説いたものなんだけど、ちょっとカッコつけすぎだろ〜。何が「行ク川ノ流レハ…」だっちゅうの。そもそも、この鴨長明は出家して隠者(引きこもり)となっているんだけど、その引きこもった理由がショボいんだ(笑)。もともと彼は京都の下鴨社っていう神社の神主の次男として生まれた。だから、自分も神主に就任しようとしたんだけど、結局なれなかったんだ。そのため、そのことにめっちゃショックを受けてしまって、彼は出家して引きこもるようになった。つまり、ただの“やさぐれ野郎”って言った方がいいね。

もう一人の隠者(引きこもり)が『徒然草』で人間や社会を鋭く観察した吉田兼好なんだけど、実はこのオッチャン、本当の名字は吉田とは言わない。もともと彼の正しい名字は“卜部”で、この卜部家が室町時代から吉田と称すようになったんだ。これが江戸時代になって誤って吉田兼好と伝えられちゃったわけだ。だから、歴史上では卜部兼好が正しい名前なんだ。

「何で俺が神主の跡継げえんだよ〜。マジやってらんね〜！」



[鴨長明]

＜随筆＞

『方丈記』(鴨長明)……………天変地異を体験して、世の無常を説く
 『徒然草』(吉田(卜部)兼好)…自然・人間・社会を鋭い洞察力で描く

さて、以上が“引きこもり野郎”による文学だったわけだけど、引きこもる奴もいれば、元気活発に旅に出る奴もいるよね。それが旅行中のこととかを綴った紀行文だ。ちょうど、この時代は鎌倉という新しい都市が出来て、京都と鎌倉を結ぶ東海道の交通も盛んになっていったこともあり、紀行文や旅日記が書かれるようになっていったんだ。

だから、源親行が書いたと言われる『東関紀行』や、作者未詳の『海道記』も、これらのどちらとも京都から鎌倉まで下って再び京都まで帰るまでの旅日記なんだ。でも、紀行文といたら、**阿仏尼**の書いた『十六夜日記』が有名だね。この阿仏尼は藤原為家(定家の子)の後妻となったんだけど、その為家が死んだ後、先妻の子である為氏と実子の為相の間で所領紛争が起こってしまった。そのため、この息子の遺産相続争いの訴訟を解決するため、京都から鎌倉に下ることになる。そして、その旅立ちの日付が10月16日(十六夜)だったことから、『十六夜日記』というんだ。

こうした旅日記もあれば、ふつうの日常で起きた内容を記した日記も書かれた。でも、ふつう日記なんて三日坊主で終わっちゃうよね。それにもかかわらず、よっぽど暇だったのか何と40年近くもずっと日記を記していた公家がいたんだ！それが**九条兼実**の日記『玉葉』だ。この日記には、平氏最盛期から幕府成立までが詳しく記してあったので、当時のことを知る第一級の史料でもある。つまり、日記というよりは歴史の史料的意味合いが濃いわけだね。



〔九条兼実〕

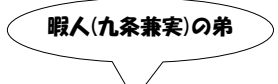
＜紀行文・日記＞

- 『東関紀行』 (源親行?)…京都から鎌倉まで下り、帰京するまでの紀行文
- 『海道記』 (作者不詳)…京都から鎌倉まで下り、帰京するまでの紀行文
- 『十六夜日記』 (**阿 仏 尼**)…息子の訴訟解決のため、京都から鎌倉に赴く紀行文
- 『玉 葉』 (**九条兼実**)…平氏政権～幕府成立までを記した日記

こういった当時のことを知るための史料には、『玉葉』のような日記だけでなく歴史書もある。この鎌倉時代にも多くの歴史書が書かれているんだけど、それが藤原為経の著といわれる『今鏡』と、**中山忠親**の著といわれる『水鏡』だ。これらは、平安時代に書かれた『大鏡』の続きにあたるもので、南北朝時代に書かれた『増鏡』とあわせて四鏡とよばれる。ただ、『大鏡』に比べるとスケールは落ちてしまうし、『大鏡』に比べると頻度は低いけどね。

さて、鎌倉幕府が成立すれば、当然幕府の歴史を記した歴史書もある。こうした鎌倉幕府の記録を編年体でつづったのが『吾妻鏡』だ。幕府自ら歴史書を書くことで、幕府の正当性も主張できるからね。

こうした幕府成立に対して、公家政権のとるべき方針を記したのが、**天台座主**(天台宗のトップ)**慈円**(**九条兼実の弟**)の著した『愚管抄』だ。これは**後鳥羽上皇の討幕挙兵を諫める**ために著したとされるもので、その内容は末法思想と**道理**に基づいている。ちなみに、道理って何かわかる？道理というのは、世間で正しいと認められた筋道(規範)のこと。だから、慈円は、「歴史を動かすものは、道理(正しい筋道)があつてこそです。今現在、幕府の政治を取り仕切っている北条義時の政治には、特に間違つた部分はなく善政と呼ぶにふさわしいでしょう。ですので、そうした鎌倉幕府に対し、後鳥羽上皇が倒幕挙兵をすることには道理(正しい筋道)がございません。」と説いたんだ。まあ、最終的に後鳥羽上皇はその忠告を聞かず、承久の乱を起こしちゃうわけだけどもね。また、一方で、こうした通史の歴史に対して、日本仏教の歴史書もこの時期に成立した。それが**虎関師錬**の著した『元亨釈書』だ。“亨”という字を“享”にしないように気をつけてね。



〔慈円〕

＜歴史書＞

- 『今 鏡』 (藤原為経?)…藤原頼通～藤原基房までの歴史を記した歴史書
- 『水 鏡』 (**中山忠親**?)…神武天皇～仁明天皇までの歴史を記した歴史書
- 『吾妻鏡』 (作者不詳)……鎌倉幕府の記録を編年体で記した歴史書
- 『愚管抄』 (**慈 円**)……末法思想と**道理**に基づいて記した歴史書
→承久の乱前に後鳥羽上皇の討幕挙兵を諫める
- 『元亨釈書』 (**虎関師錬**)…最初の日本仏教の歴史書

平安時代の中頃は、『源氏物語』などのように、宮廷内の恋愛を題材とした物語が多かったよね。でも、院政期を経て、時代は「武者の世」となった。そのため、こうした戦乱と変動を続ける時代・人間を題材とした**軍記物語**が多く書かれるようになる。

その代表例が、保元の乱を題材にした『**保元物語**』や、平治の乱を題材にした『**平治物語**』、そして平家一門の栄達から壇ノ浦での滅亡までの歴史を描いた『**平家物語**』(作者は**信濃前司行長**が有力)だ。でも、これらは戦の内容だけを記したわけじゃないんだよ？例えば、一番目の『保元物語』は、当時最強の武将として**鎮西八郎**と称されながらも、戦に敗れた**源為朝**の活躍を中心に描いていたりする。

この『平家物語』の冒頭「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす。おごれる人も久しからず。…」というの君たちも知っているよね？この鎌倉時代でも、このフレーズは非常に有名だったんだけど、実はこの時代の武士や庶民の識字率は低かった。つまり、文字を読んだり書いたりするだけの教養がなかったわけだ。では、それにもかかわらず何故このフレーズが有名だったのか？その理由は**琵琶法師**の存在があったからなんだ。琵琶法師というのは琵琶を弾きながら『平家物語』などを語る盲目の芸能者たちのこと。彼らが琵琶をベンベンベン…と伴奏しながら『平家物語』を語るんだけど、これを**平曲**という。こうして『平家物語』は、琵琶法師による平曲で文字の読めない庶民にも大ヒットしていったんだ。そして、多くの語り手・読者の手を経るうちに、改訂・増補がくり返され、成長していったんだけど、このような過程で出来た『平家物語』の増補版が『**源平盛衰記**』だ。



[琵琶法師]

＜軍記物語＞

- 『**保元物語**』……**鎮西八郎源為朝**の活躍を中心に保元の乱を描く
- 『**平治物語**』……源義朝の子の**義平**を英雄的に平治の乱を描く
- 『**平家物語**』……**信濃前司行長**が著し、**琵琶法師**による**平曲**で庶民に流行
- 『**源平盛衰記**』…『平家物語』を増補したもの

なお、院政期文化の平将門の乱(935～940)を題材にした『将門記』や、前九年の役(1051～1062)を題材にした『陸奥話記』においてもそうだけど、歴史物語や軍記物語が編纂された時代は、実際にその戦乱などが起きた時代から、一つ後の時代にズレるという傾向が強い。なぜなら、軍記物語などを書くにあたっては、その戦乱に登場する人物や戦場などの研究・調査が必要になってくるからだ。ゆえに、平将門の乱や前九年の役が起きた時期は撰関政治期(国風文化)にあたるが、それらの軍記物語『将門記』・『陸奥話記』が編纂されたのは、一つ後の時代の院政期(院政期文化)になる。このことは、鎌倉文化の軍記物語においても活用できるので、一つのテクニックとして知っておくとよい。

さて、先ほど述べたように、この当時は識字率が低かった。しかも、たとえ庶民の中で文字を読める人がいたとしても、その内容は難しかったりする。そこで、こうした庶民のために易しい文体で書いてあげていったのが説話集だ。その説話集の代表作が、10個の教訓的な内容をまとめた『**十訓抄**』や、平安時代から鎌倉初期の説話を集大成した**橘成季**の『**古今著聞集**』、そして、『今昔物語集』の改訂増補版にあたる『**宇治拾遺物語**』**無住**の著した仏教説話集の『**沙石集**』だ。

ちなみに、この「説話」の意味って知ってるかな？「説話」というのは、年少者を対象に「○○をしたりすると、最終的にはこんな事になってしまうんだよ～」。だから、○○なようなことはしないようにね」という教訓を示したもののことだ。これら説話文学が多く書かれたのには、鎌倉時代という新時代が到来したことにより、今までの貴族社会だけでなく、地方や庶民の世界に新たな興味が集まったことが背景にある。

＜説話集＞

- 『**十訓抄**』(作者不詳)……10項目の教訓的な説話を収録したもの
- 『**古今著聞集**』(橘成季)……今昔物語・十訓抄など古今の説話を題材別に分類したもの
- 『**宇治拾遺物語**』(作者不詳)…『今昔物語集』の後を追った説話集
- 『**沙石集**』(**無住**)……禅僧である無住によって書かれた仏教説話集

最後は学問のお話だ。この当時の学問は、基本的には公家の専売特許みたいなものだったけど、源実朝に代表されるように、武士の中にも学問好きな奴が現れてきた。それが北条氏の一門で、評定衆として幕政にも参加した北条実時だ。彼は、自分の蔵書(持っている本)を公開して、武蔵国の六浦(鎌倉幕府の外港として栄えた地名)にある抄名寺境内に金沢文庫っていう施設図書館を設けたんだ。金沢文庫は神奈川県の名として知っている人もいるだろうけど、その金沢町には現在も金沢文庫という図書館があって、現在は歴史博物館として残っているんだよ。



[現在の金沢文庫]

[F] 鎌倉文化の特徴

さて、これで鎌倉文化の内容は終了したんだけど、ラストにこの文化の特徴をまとめておこう。今まで見てきたことからわかることは以下の点だよ。

＜鎌倉文化の特徴＞

- ① 公武二元文化(公家の伝統的文化と武士の新しい文化)
- ② 庶民文化の成長
- ③ 宋・元の新しい中国文化の導入

①の「公武二元文化」の内容はいろんな分野で顕著だったよね。文学の面では公家がまだまだ勢力を残していたけど、逆に彫刻とか工芸分野では、武士の文化が徐々に成長してきていたよね。

それから、文学面では説話集とか軍記物語でも見られたように、②のような「庶民の文化」が徐々に現れてくるようになったね。

③の「宋・元の新しい中国文化の導入」は、建築における大仏様や禅宗様、それから加藤景正の製陶技術が中国から入ってきたことが、その特徴にあたる部分だね。

[文化史⑧－室町文化(室町時代の文化)－]

[A] 室町文化の特徴

ひとくちに室町文化と言っても、それぞれ時期によってその特徴が異なる。そのため、この室町時代は3つの文化に区分されるんだ。それがまず、南北朝時代にあたる**南北朝文化**。それから3代将軍**足利義満**の時期にあたる**北山文化**。これは、義満の建てた金閣が京都の北山にあったからことから、北山文化と言う。そして8代将軍**足利義政**の時期にあたるのが**東山文化**。これは義政の建てた銀閣が京都の東山にあったから東山文化と言うわけだ。

＜室町文化の区分＞

- ① **南北朝文化** (南北朝時代にあたる文化)
- ② **北山文化** (3代将軍**足利義満**時に栄えた文化)
- ③ **東山文化** (8代将軍**足利義政**時に栄えた文化)

じゃあ、3つに分けられるわけだから、それぞれ特徴が異なるはずだね。じゃあ、どういう特徴があるのか見てみよう。ただ、南北朝文化にはこれといった特徴はない。南北朝時代の時期は戦の時代だから、文化がそれほど栄えるわけじゃないからね。

＜室町文化の区分＞

- 北山文化…① 武家文化が伝統的な公家文化を基礎に発展
- ② 元・明の禅宗文化の影響
- 東山文化…① 「簡素」で「幽玄」な伝統的な日本文化の形成
- ② 応仁の乱による中央文化の地方普及と民衆化の進展

北山文化の特徴は、まず公家の文化と武士の文化が融合しているところにある。特に義満が建てた金閣が、その特徴を最も顕著に表しているね。金閣寺は3層から構成されているんだけど、その1層は寢殿造という公家文化を代表するもの、3層は禅宗様という武家文化を代表する建築様式で構成されている。つまり、この金閣こそ公家文化と武家文化が見事に融合された造りになっているわけだね。もう一つの特徴は中国(元・明)の禅宗文化の影響を受けているというところ。例えば、この時代に発展した水墨画がその象徴だね。詳しくは、絵画のところでも説明するけど、水墨画というのは中国から伝わった禅宗がその背景にあるからね。

これに対して東山文化の特徴は二つあって、まずは銀閣の書院造に代表されるように「簡素」で「幽玄」といった趣のある伝統的な日本文化が形成されたことが一つ目の特徴。例えば、能や茶道とか、華道、そして香道なんていった今でいう伝統的なものがこの時代に出来上がったわけだ。能も茶道も華道もそうだけど、これら全部“JAPAN”って感じの伝統的な趣があるもんね。一方で、**1467年**には**応仁の乱**が起きた。この戦乱によって京都が荒廃してしまったため、公家などの文化人は京都に居られなくなってしまった。そりゃ、京都にいたら戦に巻き込まれちゃうもんね。そこで、彼らは地方の大名を頼って行ったんだ。そのため、彼ら中央の公家が地方に行くことによって、中央の文化が地方に普及していったわけだ。これが二つ目の特徴だ。

それから、この室町文化を学習するにあたって一つ留意しておいてほしい点があるんだ。この時代に関しては解説を読むだけではなく、必ず通常テキストを参照しながら学習してほしい。なぜかというと、左のページが南北朝文化と北山文化、そして右のページが東山文化になっているよね。でも、この時代は、それぞれ南北朝文化は南北朝文化、北山文化は北山文化といった時代別に学習するよりも、文学は文学、絵画は絵画といったように分野別に学習した方が理解しやすい。だから、例えば連歌の歴史は南北朝・北山・東山文化と時代をまたいで解説する。そのため、文章だけだと、その語句がどこの時代にあたるのか把握しきれなくなってしまう可能性がある。そこで、随時テキストは手元に置いたまま、時代をちゃんと確認しながら学習して欲しいんだ。

〔B〕文学史・学問史

南北朝時代という時代は、南朝と北朝に分かれて争っていた時代だったね。そして「自分たちの朝廷の方が正統な朝廷だ」ということで争っているわけだ。だから、「うちの正統の方が正しいんだ」ということを本に書いて主張したんだ。それが、まず南朝の正統性を主張した『神皇正統記』。これは、南朝勢力として常陸国の小田城で北朝に対抗した北畠親房が、その当時の後村上天皇(後醍醐天皇の子)に「南朝こそが正しいんですよ」って説いたものだ。そして、伊勢神道の強い影響から、三種の神器を南朝が持っていることこそが、南朝が正しい理由だと述べたんだ。

これに対して、北朝の正統性を主張したのが『梅松論』だけど、作者はわかっていない。これらは争っている当の武士たち本人の立場から書かれたものだけど、当然この時代には公家もいるよね。その公家の立場から鎌倉時代を記述したのが四鏡のラストである『増鏡』だ。

南北朝時代ってのは混沌とした時代だったから、それぞれの正統性を示すため、こうした歴史物が多く書かれる。他にも、湊川の戦い(1336)や石津の戦い(1338)・藤島の戦い(1338)などのように、戦いが多かったのもこの時代の特徴。じゃあ、それだけ戦いが多かったのなら、当然こうした戦いを題材とした軍記物語が書かれてくるよね。それが有名な『太平記』で、著者は小島法師だと言われている。これは南北朝の動乱を題材としていて、南朝に同情的な記述が多かったんだ(著者が南朝側の人間だったからとか、もしくは南朝側への鎮魂の意味を込めて、同情的に書いたとも言われているけどね)。



〔太平記読み〕

この『太平記』は今でも非常に有名な軍記物語だけど、実はこれがブレイクしたのは江戸時代なんだ。そもそも、『太平記』ははじめ物語僧という僧侶によって、語られる程度のものだった。ところが、江戸時代になると、これを講釈して政道や兵法を論じることが武家方から要請された。つまり、『太平記』から政治のやり方や戦の兵法をわかりやすく教えてほしい、という需要が武士側から出てきたわけだね。そこで、太平記をわかりやすく説明する人が現れたんだ。この『太平記』の講釈師を太平記読みという。そして、『太平記』は江戸時代に学問の役割として庶民にも普及していったんだ。

ただ、この『太平記』の中で足利尊氏のことを記している部分で「それ、おかしいよ」ってケチつけたのが九州探題の今川了俊(貞世)だった。そこで、太平記の誤っている部分を集成して、北山文化の時期に彼が著したのが『難太平記』だ。

こういった文学作品以外で文学的なものといったら和歌がある。和歌っていうのは、五・七・五・七・七で歌を詠む、今で言う短歌のこと。この和歌が鎌倉時代まで流行っていたんだけど、室町時代からは連歌という和歌から発展した遊びが広く民衆の間でも楽しめるようになっていったんだ。

これは、まず一人が五・七・五の部分までの上の句を詠む。続いて、もう一人がその五・七・五に合うような、七・七の下の句を詠むんだ。そうしたら、今度はまた別の人がその七・七の下の句に合うように、五・七・五の上の句をつくるというリレー形式の和歌なんだ。つまり、今までの和歌よりもゲーム性を兼ね備えた、娯楽性を持ったものに変化していったわけだね。これを一般的には、複数人間で行い、100回続くまで詠み続けるんだけど、今言ったように、初めの頃の連歌は遊びのレベルに過ぎなかった。



〔連歌の会〕

これを正式なジャンルにまで高めたのが、南北朝時代の関白・摂政及び太政大臣であった二条良基だ。彼も連歌をやっていたんだけど、いろいろな人の連歌を集めた連歌名作集として『菟玖波集』という連歌集をつくったんだ。そうしたら、これが準勅撰として天皇に公認されることになった。準勅撰という言葉にひっかかるかもしれないけど、天皇に認められたんだって思ってくれればいい。

天皇に準勅撰として認められたことによって、連歌は正式なジャンルとして成立した。そうすると、ちゃんとしたジャンルに認められたわけだから「連歌を詠む際のルールを決めよう」って話になるよね。そこで、同じく二条良基が作った連歌のルールブック、規則集が『**応安新式**』だ。例えば、同じ言葉を連続で使ってはいけない、とかいったルールが定められたんだ。

ところで、「この“つくば”って何なの？」って少し気になるよね。実はこの“つくば”という言葉は連歌のことを指しているんだ。そもそも、この連歌をはじめて日本で詠んだのはヤマトタケルノミコトだと言われる。そして、彼が筑波山のおもとのふもとで詠んだことから「連歌＝つくば」と言われるようになったんだってさ。だから二条良基の『菟玖波集』は「連歌集」というそのままの意味になるわけだ。



[宗祇]

こうして、一つのジャンルとして確立された連歌は、数多くの人によって詠まれていくようになる。このような中で、**東山文化期**に連歌を大成したのが**宗祇**だ。彼により大成された連歌のことを**正風連歌**と言うんだけど、まあ、簡単に言うと“完成された連歌”ってことだ(正風というのは“正統な～”とかいう意味をさす)。

そして、この宗祇が、また新しく詠まれた連歌の作品をまとめて編纂したのが『**新撰菟玖波集**』だ。さっき言ったけど「つくば」は連歌という意味なのだから、今度は「新しく撰んだ連歌集」ってことになるよね。また、この**宗祇**が自分の弟子の**肖柏・宗長**と、三人で100回続けた連歌を収録したものが『**水無瀬三吟百韻**』。これは、**水無瀬川**の近くに奉納し、**三人**で歌を**吟**じて**百回**詠んだことから付いた題名だ。

..... [古今伝授・一条兼良]

連歌からは話がやや逸れるんだけど、この宗祇に関連する内容に少し触れておこう。彼は連歌をやるだけじゃなく、当然その根本にある和歌や古典に関してもエキスパートの人物だ。そのため、**宗祇**は**東常縁**という人物から**古今伝授**を授けてもらっているんだ。「じゃあ、古今伝授って何よ？」って話だよ。

この当時の公家も懐古主義に基づき、昔の良き時代を研究したりしている。だから、当然昔の和歌も研究したりしていくわけだけど、じゃあ昔の和歌の根本經典みたいなものって何だろう？それは、やっぱり『古今和歌集』だよ。でも、その『古今和歌集』の中には、非常にわかりづらく難しい内容のものも入っていたりする。そこで、その『古今和歌集』の難解な部分の解釈の仕方を、文章ではなく口頭で秘伝として弟子に伝えていったのが**古今伝授**なんだ。これは今出てきた**東常縁**から**宗祇**、**三条西実隆**に引き継がれて、その後の戦国時代にもいろいろな人に引き継がれていった。

また、この宗祇から和歌や古典を学び、当時の公家の中でNo.1の文化人と言われたのが**一条兼良**だ。彼は当時最高の教養人とされたわけけども、やっぱり彼も若い頃は、普通の公家と同じく昔の朝廷の研究していた。つまり**有職故実書**を書いていたわけだね。それが『**公事根源**』だ。“公”家の“事”の“根源”を研究するわけだから題名そのままだよ。その後、彼が関白と偉くなってから書いたのが『**花鳥余情**』。これは源氏物語の注釈書で、この文脈の内容は実はこういう意味だったんだ～、とか解説していったものだ。その後、応仁の乱が起きて最終的に**足利義尚**が9代将軍となったよね。でも彼はまだ若くて政治的にはまだ経験がないので、一条兼良に政治の心構えとかを尋ねたわけだ。その内容をまとめたのが『**樵談治要**』だ。例えば足輕は禁止した方がいいよ、とかいった内容だ。

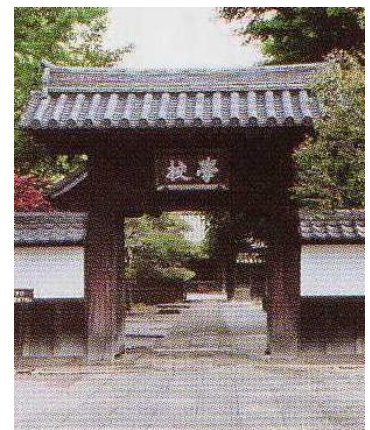
この後、さらにこの連歌を発展させたのが**山崎宗鑑**。彼の連歌は今までの連歌とは少し違う。彼の連歌は、下の句(七・七)まで作らずに上の句(五・七・五)だけで終わらせて意味を持たせるんだ。つまり、これは五・七・五だけで終わらせる**俳諧**(俳句)のことだね。だから、山崎宗鑑は俳句の元祖ということになり、その彼が創めた連歌を**俳諧連歌**と言うんだ。

その彼の俳諧連歌をまとめたものが『**犬筑波集**』。今までの菟玖波とは漢字が違うので気をつけてね。ちなみに、犬には「おもしろい・滑稽な」って意味があるので、『犬筑波集』は「おもしろい連歌集」ということになる。この「犬」＝「おもしろい」が指しているのは俳諧連歌という、今までの連歌とはちょっと変わった連歌であるということになるよね。

これで連歌は終了。それじゃあ、南北朝文化と北山文化の文学の残っている部分をやっていきたいので、まず南北朝文化に戻ろう。この時期の貴族たちは、先ほどの連歌を作っていたり、ずいぶんと暇だよ。この時期の貴族は、政治の中心が武家に移ってしまっているのだから、基本的にはすることがないからね。だから、「今は武家の世の中になっちゃってるけど、平安時代の頃とかは貴族の世だったんだよね。あ〜。昔は良かったな〜」なんていって、昔の朝廷のことを研究するんだ。それが朝廷の儀式や年中行事を研究する**有職故実**という学問だ(鎌倉文化でも学習したよね)。これで有名なのが後醍醐天皇の書いた『建武年中行事』と、北畠親房の書いた『職原抄』。前者は、後醍醐天皇が自らの政治力の再興のために宮中の年中行事を月ごとにまとめたもので、後者は日本の官職制度について書かれたもの。これで南北朝文化の文学は終了だ。

これが北山文化になると、日本と明との間に日明貿易が始まったよね。ほら、だって北山文化って義満の時代でしょ？そうすると、中国の明と交易するわけだから、中国語を喋れないとまずい。そこで、禅宗の臨済宗のトップである五山の僧たちが、中国の漢詩や**宋学**を研究するわけだ。この学問を**五山文学**と言うんだ。五山の僧による文学を五山文学というって、そのまま過ぎただけだね。そして、その研究の成果を本として出版したのが**五山版**だ。その五山文学の有名な僧が、南禅寺の**義堂周信**と相国寺の**絶海中津**だ。“信”と“津”の漢字に気をつけてね。また漢詩を研究しているわけだから、義堂周信の方は漢詩文集である『空華集』を著している。

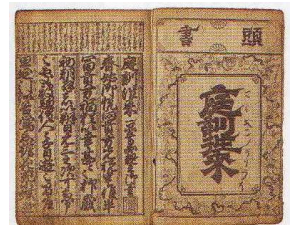
では続いて東山文化の文学史を見ていこう。この時期には応仁の乱(1467)が起きたせいで京都は荒れ果てちゃって、公家とかの文化人は京都に居られなくなっちゃった。だから、公家たちは地方の大名とかを頼っていくようになる。そのため、中央の文化が地方に普及していった、というのは始めにやったよね。だから地方でも教育が普及するんだ。特に武士の中でも教育に力を入れる人が出てきて学校とか作っちゃう。それが**関東管領上杉憲実**の再興した**足利学校**だ。これは昔からあったんだけど、廃れちゃって、彼がこれを再興したんだ。新しく作ったんじゃないよ、再興だからね。そして、この足利学校に全国から僧侶や武士が集まってきて、高度な教育が施されたわけだ。そしたら3000人近くも学生が集まって、**フランシスコ・ザビエル**に「坂東の大学」とまで称されるようになったんだ。



〔足利学校〕

同じように教育が地方に普及していったものを具体的に見てみよう。それが下の儒学の地方普及ってやつだ。例えば、**桂庵玄樹**という儒学者は明から帰国後、**薩摩の島津氏**や**肥後の菊池氏**に招かれ、そこで儒学の講義をしたんだ。その後、島津氏のもとで栄えた彼の儒学の一派を**薩南学派**と言う。だから彼のことを薩南学派の祖なんて言うんだよ。それに対して、**南村梅軒**という朱子学者は**土佐の吉良氏**に仕えて朱子学を講義したんだ。そして、この吉良氏で興った儒学の一派を**南学派**、又は**海南学派**と言う。

このように、この頃から既に地方の武士の中では子供に教育を受けさせる習慣が出来ていた。じゃあ、どこで教育を受けさせるかという、実はお寺なんだ。この時代は、江戸時代の寺子屋のような教育施設ってのは整ってないから、基本的には寺院に預けるんだ。その寺で用いられた教科書が『庭訓往来』というもの。これは**往来物**と呼ばれる手紙形式で編纂された初等教科書だ。作者は**玄恵**とされているんだけど、読み方は“ていくん”じゃなくて“ていきん”じゃないとダメだから気をつけてね。なおかつ、こうした教育が武士の間で広まったわけだけど、この当時には既に貨幣経済も浸透していたよね。だから、武士だけじゃなく商工業者も職業上、読み、書き、計算が必要になる。そのため国語辞書が作られたんだけど、それが**饅頭屋宗二**が刊行したといわれる『節用集』だ。



〔庭訓往来〕

[C] 建築史

3代将軍足利義満の時期に栄えた文化を北山文化と言う理由は、義満の造った金閣が京都の北山にあったからだったよね。この足利義満が建てたのが鹿苑寺金閣だ。ただし、金閣寺って書いてはダメ。その理由は、金閣は寺ではなくて鹿苑寺という寺の中にある一つの建物でしかないからだ。もともと、鹿苑寺には金閣(舍利殿)以外にもいろいろの建物があったんだけど、義満の子の義持によって金閣以外の建物は取り壊されちゃったんだ。



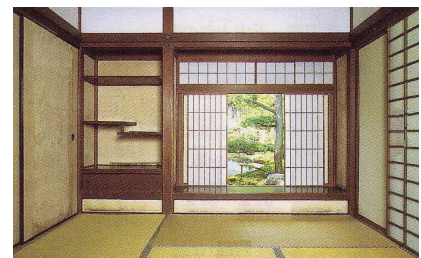
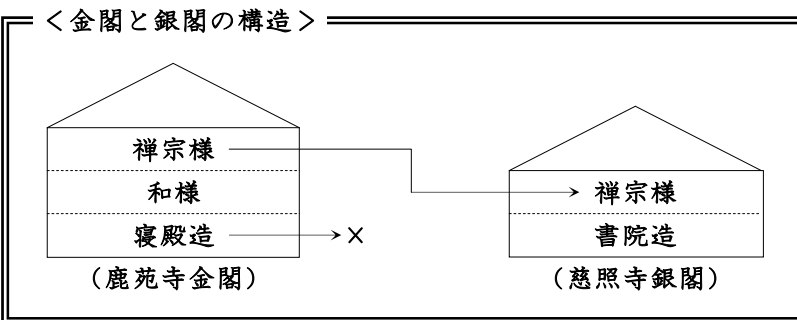
〔鹿苑寺金閣〕

さて、この金閣は3階建てで、1階が寝殿造、2階は和様、3階の最上層が禅宗様で出来ている。そして、これにはちよいと深い意味合いがあるんだ。1階の寝殿造は、公家文化の代表格。また3階の禅宗様は禅の精神をもった武士の文化を表している。つまり公家の文化と武士の文化が融合しているのが、この金閣なわけだ。そして、この公家文化と武家文化の融合こそが北山文化の特徴でもあったよね。これは、義満が武家の頂点である征夷大将軍になった後、公家の頂点である太政大臣になっていることも背景にある。

これに対して東山文化を見てみよう。東山文化の名称の理由は足利義政の造った銀閣が京都の東山にあったからだったよね。そして、先ほどの3代足利義満の建てた鹿苑寺金閣に対して、8代足利義政が建てたのが慈照寺銀閣だ。ただ、これも銀閣寺って言っちゃいけない。これも慈照寺っていう寺の中に銀閣があるからだ。この銀閣は2階建てなんだけど、1階は書院造で、2階は金閣と同じように禅宗様となっている。書院造というのは、小学生のころ習ったと思うけど、床の間があって、襖があって、明障子・付書院・違い棚があって、…というように今の和風建築のこと。ほら、和風の部屋って、「簡素」で「幽玄」とかいった趣があるでしょ？今現在にも続く伝統的な日本文化が形成されたのが東山文化の特徴だったよね。それを見事に表しているのが、この書院造だ。この書院造の建物で最も有名なものが、慈照寺の東求堂同仁斎。これは銀閣の中にあるわけじゃないよ。銀閣の前に池があって、その向かいに東求堂という建物が建っている。そして、この建物の中の右奥にある義政の書斎のことを同仁斎というんだ。



〔慈照寺銀閣〕



〔慈照寺東求堂同仁斎〕



〔慈照寺庭園〕

ところで、鹿苑寺金閣や慈照寺銀閣の写真を見てみるとわかるけど、それぞれ金閣・銀閣の前には池が広がっているよね。こういった池の近くには左の写真のような回遊式庭園と呼ばれる庭園があるんだ。回遊式庭園というのは、一定の順路にしたがって池のまわりの庭をめぐっていくと、築山・野筋・洲浜など移り変わる様々な景色を鑑賞できるというもの(江戸時代に、各大名によって造営された水戸藩の偕楽園、加賀藩の兼六園、岡山藩の後楽園といった日本三名園など、大名庭園のほとんどが回遊式庭園である)。この回遊式庭園として有名なものが、鹿苑寺庭園や慈照寺庭園、



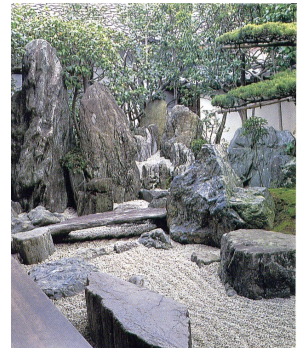
〔西芳寺庭園〕

庭全体が苔で覆われていることから通称**苔寺**とよばれる**西芳寺庭園**だ。そして、こうした庭を造ったり整備したりする作庭のことを**山水河原者**と呼ぶ。その中で有名な作庭が、将軍足利義政に寵愛されて「天下第一」の作庭と呼ばれた**善阿弥**だ。なお、もしも、回遊式庭園に足を運んでみたかったら、東京の**六義園**に行ってみるといいよ。これは江戸幕府の5代将軍徳川綱吉の側用人として仕えた柳沢吉保が造営させた回遊式庭園なんだけど、中央線の水道橋駅から歩いて10分ぐらいで行けるからね。

こういった庭園には回遊式庭園以外にも様式があるんだけど、その様式の 하나가**枯山水**と呼ばれるもの。これは水を使わないで、石とか砂で自然の海や川の流れを表現したものなんだ。この枯山水で有名なのが**竜安寺石庭**と**大徳寺大仙院庭園**だ。竜安寺の石庭は修学旅行で京都に行く場合、必ずと言っていいほど訪れることになるよね。僕も中学3年の修学旅行で行ったんだけど、僕からしてみれば、トンボで砂利に波線をつけただけに見えて、その時は何が素晴らしいのかさっぱりわからなかった。実は、この竜安寺の石庭の白砂利の部分は海を表していて、15個ある石は島を表しているそうなんだ。まあ、解釈の仕方は人それぞれ自由なんだけど、実はこの石庭にある15個の石は、どこから眺めても14個が見えないっていうことは知ってたかな？必ず一つ隠れるというところに日本の美というものが表れているよね。



〔竜安寺石庭〕



〔大徳寺大仙院庭園〕

〔D〕 絵画史



〔寒山図〕

さて、絵画の話に移っていこう。この室町時代から広まった絵画の技法の一つに、墨一色で描く**水墨画**がある。これは墨の濃淡、つまり墨を濃く塗ったり薄く塗ったりすることで、色合いを出していくんだ。でも、そもそもこの水墨画っていうのは、日本で生まれたものじゃなくて中国から禅宗と一緒に伝わったものだった。だから、水墨画が伝わってきた当初は、絵画といっても禅宗とのつながりが非常に強かったんだ。つまり、水墨画を描くのは修行の一環のようなものだったわけだね。それゆえ、これを描いたのも、当然坊主だったんだ。その坊主の中でも絵のうまい奴が出てきて、その日本最古の水墨画の坊主が『布袋図』を描いた**黙庵**と、『寒山図』を描いた**可翁**だ。

そして、北山文化になると、『**五百羅漢図**』を描いた**明兆**、『**瓢鮎図**』を描いた**相国寺**の禅僧**如拙**といった本格的な画僧が登場する。

この後者の如拙が描いた『瓢鮎図』は、変なオッサンがヒョウタンを持ってナマズを捕まえようとしている様子が描かれている。これは「瓢箪で鮎をいかにして捕まえるか」という禅問答、つまり**公案**の内容を描いたものなんだ。ちなみにその答えは「なかなかいいね。もっとうまくやるならヒョウタンに油を塗った方がいいよ。」なんだってさ。でも、そもそもナマズを捕まえること自体、すべりやすいから素手では難しいでしょ？その上、そいつをひょうたんで捕まえるなんて不可能じゃん？そして、ダメ押しはその答えだよね。もっとすべりやすい油を塗って…。まあ、こういった水墨画に公案の絵が描かれていることから、この頃はまだ水墨画が禅宗の影響下にあることがわかるよね。



〔瓢鮎図〕

この如拙から水墨画を学んで、発展させたのが『寒山拾得図』を描いた周文。そして、この周文から水墨画を学び、中国に渡った後に水墨画を大成させたのが雪舟だ。大成させたというのは、水墨画を完成させたということだけど、具体的に言うと、今までの禅の制約を乗り越えたってこと。つまり、禅の縛りは受けず、自由な絵を描くってことだ。だから、彼の作品である『四季山水図巻(山水長巻)』とか『秋冬山水図』、『天橋立図』は、禅に関係した公案とかは全く入っていない風景画なんだ。



〔四季山水図巻(山水長巻)〕



〔寒山拾得図〕

＜水墨画家の覚え方＞

☆「民情出世(みんじょうしゅっせ)」
 みん→明兆/じょ→如拙/しゅ→周文/せ→雪舟

この中国から伝来した水墨画に対して、日本古来の日本画が大和絵と呼ばれるものだったね。そして、この時期に大和絵は2大流派に別れていったんだ。それが土佐派と狩野派の2つ。簡単に違いを言うと、土佐派は天皇や公家つながりで、狩野派は幕府つながり。

その土佐派の祖が土佐光信という人で、彼の画風は純粋な大和絵で、彼は朝廷の宮廷絵所預という朝廷お抱えの絵師になって名を馳せていった。それに対して、幕府御用絵師といって幕府お抱えの絵師になったのが狩野派。この狩野派の画風は、土佐派のような普通の大和絵とは少し違う。土佐派は純粋な大和絵だったけど、狩野派のは従来の大和絵に水墨画を混ぜた和漢(日本と中国)融合の様式なんだ。簡単に言えば「大和絵」＋「水墨画」ということ。その狩野派の祖が『周茂叔愛蓮図』を描いた狩野正信で、その息子が狩野元信。その息子の元信が描いた作品が、大徳寺にある『大仙院花鳥図』。これは、この絵の描き方だけ見ると水墨画っぽく見えるかもしれないけど、ちゃんと色が付いている大和絵の様式をとっているんだよ。ちょっとモノクロだとわかりにくいけどね。



〔大徳寺大仙院花鳥図〕

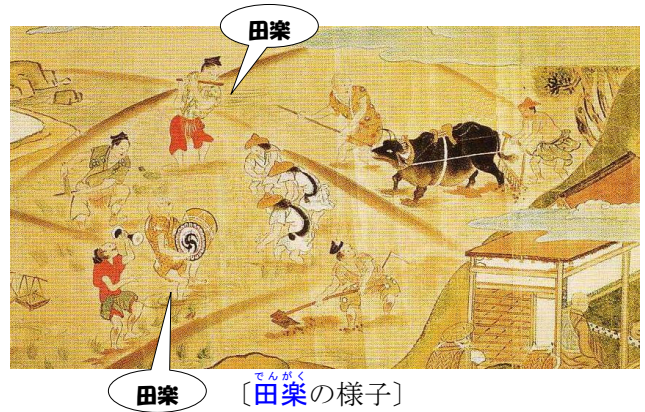
＜狩野派の覚え方＞

☆「可能性もっと出せるよ」
 可能→狩野/性(せい)→正(せい)信/もっと→元信/出せ→大仙院

[E] 芸能史

日本の伝統的な能は、実は中国から伝来したものではなくて、ずっと前から日本にあった猿楽と田楽というものが起源なんだ。じゃあ、猿楽と田楽って何だって話になってくるよね。そこで、まずは猿楽の方から説明していこう。この猿楽っていうのは奈良時代に唐から伝わった散楽が語源にある。散楽というのは、曲芸とか物まねのこと。そして、この散楽が平安中期以後なまって猿楽に発展したんだ。散楽の“ん”が猿楽の“る”に一文字変わったただけだよ。だから、この猿楽っていうのも、結局は散楽と同じで曲芸とか物まねには変わらないんだ。今でも宴会などでやるかくし芸や物まねと変わらないね。

一方で、田楽っていうのは農民の中で流行った踊りだ。これはね、田植えをするでしょ？でも田植えって単純作業で飽きるじゃない？そこで腰鼓、つまりちっちゃい太鼓とか楽器をつかって田植えをしている人を囃すんだ。それが田楽だ。ちなみに右の絵でもそうだけど、女の人が田植えをしている横で、鼓を叩いている人たちがいるよね。これが、初めの頃は農耕儀礼として農村で演じられていたんだけど、平安時代の末になると貴族にも広まり、大流行していったんだ。



こうして猿楽や田楽がブームになると、そういった田楽や猿楽を芸として専門的に演じる人たちが出てくる。そして、ただ単に歌ったり踊ったりするだけじゃ売れないので、彼らはその歌舞に演劇としての仕組みを加えて人前で演じるようになったんだ。つまり、今までは素人的な遊びだったものが、本格的に見世物に出来るレベルへとアップしたわけだね。この演劇のことを能といひ、これによって、今までの猿楽は猿楽能。田楽は田楽能と呼ばれるようになったんだ。

そして、この猿楽能は田楽の要素をも取り入れていき、猿楽能が流行っていったんだ。そうすると、この猿楽を専門的に演じる猿楽師という人たちが生まれて、彼らによって芸能集団が形成される。でも、自分たちで集まって集団を作ったとしても、やっぱ不安になるよね？いつ新しい他の集団が出てきて自分たちが追い出されるかわからない。そこで、寺社に保護してもらって座(独占的な同業者組合)を結成するんだ(つまり、中世の社会経済史で学習した座の一つだね)。この出来上がった座を保護している本所、それが大和国守護である興福寺だ。そして、この興福寺に保護してもらって隆盛したのが、大和国にあった大和猿楽四座と呼ばれる観世座(もと結崎座という)・金春座・宝生座・金剛座の四つの座だ。この観世座から出て、3代将軍足利義満の保護のもと、猿楽能を大成させたのが観阿弥清次とその息子の世阿弥元清だ。ちなみに、彼らが所属していた観世座というのは、もともと結崎座といったんだけど、観阿弥が自分と世阿弥の名前から観世座と改称したものだ。



[能(観世能の興行風景)]

その世阿弥の著書で、世阿弥が観阿弥から聞いた、能の作り方・演出の仕方など能の奥義を記したものが『風姿花伝(花伝書)』だ。これは世阿弥が親父に教えてもらったものを記したわけだけど、当然世阿弥だって自分の子供に能の極意を記している。それが『花鏡』だ。これは、長男の元雅に授けたものなんだけど、次男の元能だって、そういった能の極意を知りたい。そこで、世阿弥の息子の元能が親父である世阿弥元清との談話を筆録したのが『申楽談儀』だ。ただし、この“申”を“猿”にしたり、“儀”を“義”にしやすいで気をつけてね。

☐ 能一能楽論一『花鏡』by 世阿弥

幽玄の風体の事
書道諸事において幽玄なるをもて上果とせり。ことさら当芸において、幽玄の風体第一とせり。
(幽玄の芸風について、すべての芸道においては、幽玄が理想の美とされている。とりわけ能においては、幽玄の芸風が第一とされている。)
……そもそも幽玄の堺とは、まことにはいかなる所にてあるべきやらん。……ただ美しく柔和なる体、幽玄の本体なり。……
(一体、幽玄の境地というのは、本当はどのようなものであるべきなのか。……ただ美しく柔和な表情は幽玄の本質である。)

この能では『源氏物語』や『平家物語』などの古典文学とか、民間伝承のお話などを素材にしたものを演じるんだけど、そのためには脚本が必要になるよね。その能の脚本のことを謡曲というんだけど、やっぱりこれらも観阿弥・世阿弥の作になるものが多いんだ。また、能って次の幕に移る時に、その間が空いちゃうでしょ？その時に客を待たせるのもまずい。そこで、この能と能の間に、滑稽で卑俗な笑いを主な狙いとした狂言が行われたんだ。これは基本的には即興的に演じられるものが多いんだけど、社会や権力者に対する皮肉や風刺が込められていたため、しばしば上演停止になったりもしたんだ。

なお、こういった能の観阿弥や世阿弥、作庭の善阿弥、立花の立阿弥、水墨画・連歌の能阿弥といったように、将軍の側に仕えて、芸能や雑用をする人を同朋衆と言う。そして、この同朋衆の人たちには「～阿弥」という名前がつく人ばかりであることが示しているように、時宗の信者である時衆の人々が多かったんだ。他にも、同朋衆ではないんだけど、彼らと同じように8代将軍足利義政に仕えた、金工の後藤祐乗もいる。彼は刀の目釘(刀身が柄から抜けないようにさす釘)や小柄(脇差のさやの外側にさす小刀)の部分に金属を使って装飾をする彫金作品で有名な人物だ。まあ、簡単に言えば、刀の部分にいろいろ装飾して、格好良く見せるものだね。

北山文化の時期に能が大成されたわけだけど、東山文化の時期に発展したものが茶道だ。では、そもそも「お茶」って、いつ頃日本に伝来したんだろう？お茶に関しては、鎌倉時代に宋から帰国した榮西が日本に抹茶を伝えたことが始まりだった。そして、当時のお茶は健康に良い薬と考えられていたことから、「お茶は体にいいですよ～。これでも飲んで病気治して下さいな」と、3代将軍の源実朝に『喫茶養生記』を献上したのは仏教史のところで学習したよね。

そうしたら、このお茶を飲む風習が南北朝時代になって庶民や武士の間で大ヒットして、茶寄合とか闘茶というものが行われたんだ。茶寄合はみんなで家に集まってお茶を飲みながらダベるもの。でも、中には「みんなでくっちゃべって、お茶飲むだけなんてつまねーよ」って奴もいるでしょ？そこで闘茶というもんが開かれるんだ。これは「利き茶」みたいなもの。つまり、お茶を飲んで、「あ～、これは静岡のお茶やね」とか、その産地を当てるゲームをして、これを賭け事にするんだ。



〔闘茶の様子〕

つまり、この南北朝時代のお茶と言うのはただの飲み会にしか過ぎない。これが東山文化になると、この茶に禅宗の精神を取り入れて、静かな中で茶を味わう「茶道」というものが始まる。まあ、簡単に言うならば、今まではわいわい皆でお茶を楽しんで飲んでいただけで、静かな場所で本格的にお茶を味わうようになるわけだ。これを創始した人が村田珠光なんだけど、…でも、ちょっと待って。この村田珠光って人は茶に禅宗の精神を取り入れたわけだから、茶だけじゃなく、禅宗の精神を学んだはずだよな？じゃあ誰に禅を学んだのか？それが大徳寺の和尚さんの一休宗純(いわゆる一休さん)。だから村田珠光は彼の弟子にあたり、彼のもとで禅の精神を学んでお茶に取り入れたんだ。

こういった茶道の、素朴で簡素な茶室で心の静けさを求めるというのが侘び茶だ。東山文化の特徴である「簡素」で「幽玄」なイメージにピッタリなのが、この茶道だね。そして、この村田珠光が創始した侘び茶を継承して簡素化したのが武野紹鷗。さらに、そこから茶道としての侘び茶を大成したのが、桃山文化期の千利休だ。ただし、千利休は桃山文化期になるので気をつけてね。まあ、千利休に関する内容は桃山文化で詳しく扱おう。

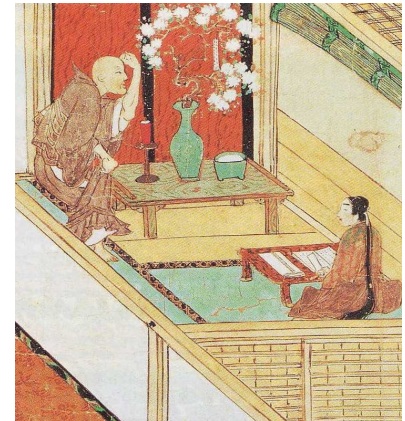
< 茶道の覚え方 >

☆「ムラムラ高めセンズリ」

ムラ→村田/たけえ→武野/せん→千利休

唐突に下ネタのゴロを入れてみたんだけど、残念なことに、女の子の中には「センズリ」が何なのかわかんない子もいる(笑)。わかんない女の子は、男の子に「ねねねねね、昨日センズリした？」って聞いてみてごらん。なお、本当に聞きちゃったとしても苦情はやめてね(笑)。

こうした茶道は日本の伝統芸能として、今現在も続いているよね。同じように、今現在も日本の伝統芸能として続いているのが、この時期に確立された花道(華道)だ。今でもそうだけど、仏壇の前には花を添えるよね？そこから発達して、座敷の床の間とかに花を飾る生け花の様式が立花様式だ。この花道の流派で有名なのが、今でも有名な池坊流。その池坊の祖が池坊専慶で、この後に池坊専応、池坊専好と続くけど、覚えるのは最初の専慶だけで十分だよ。



〔立花〕

じゃあ、ラストに庶民の文化を見ていこう。じゃあ、庶民の文化って何だろう？君たち庶民もクラブに行って踊ったり、カラオケに行ったりして歌うでしょ？この時代も同じで、庶民の文化はやっぱり踊りと歌。まず、踊りで代表的なものが桃井直詮(幸若丸)が創始した幸若舞。これはまず扇子をもつでしょ。そして、鼓の「ポン・ポン」ってリズムに合わせて踊るんだ。ちなみに、これが大好きだった戦国武将が織田信長だよ。信長は「敦盛」という幸若舞の曲の一つが大好きでね、桶狭間の戦いの出陣前にも「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。一度生をえて滅せぬ者のあるべきか」って踊ったんだ。皮肉なことに、信長自身も50歳間近の49歳で明智光秀に殺されちゃうんだけどね。こうした幸若舞は、『義経記』や『曾我物語』など軍記物語の内容をもとにしたものが多かったので、織田信長や豊臣秀吉などの武将の間で人気が高かったんだ。一方、庶民の中で特に流行ったのは風流踊りと呼ばれるものだ。風流踊りというのは華やかなカッコをして踊ることをさすんだけど、これが都市や農村で流行っていったんだ。そして、後にこの風流踊りと念仏を唱えて踊る念仏踊りが結びついて、今日の盆踊りへとつながっていく。



〔風流踊り〕

さて、今までののは踊りだったけど、歌の方はどうだろう？この当時は、小歌と呼ばれる男女の恋愛などを歌った民間歌謡が庶民の中で流行していたんだけど、その小歌の良いものを集めた小歌ヒットソング集が『閑吟集』だ。

一方で、この時代には地方に文化が普及したり、教育のすそ野が広がったことで読者層も増えるようになった。そのため、庶民にも読みやすい短編の物語が作られるようになったんだ。それが『酒呑童子』や『一寸法師』、『浦島太郎』、『物くさ太郎』などの御伽草子だ。まあ、今でいう御伽話のことだけど、これらがいつの時代に出来たか知らなかった人も多いんじゃないかな？ちなみに、これは庶民が主人公であり、庶民の台頭を示している。特に一寸法師なんて、針一寸の大きさの一寸法師が鬼を倒しちゃうでしょ。実は、これって小さな者が大きな者を倒すという下剋上を表したものでもあるんだよ。



〔物くさ太郎〕

[文化史⑨－桃山文化(安土・桃山時代の文化)－]

[A] 桃山文化の特徴

織田信長の居城は**安土城**(本能寺の変後に焼失しちゃったけどね)。また、豊臣秀吉の晩年の居城は**伏見城**で、その伏見城の跡地には桃が植えられたことから、この地は**桃山**と呼ばれるようになった。この織豊政権(信長・秀吉政権)の時期を、その居城にちなんで安土・桃山時代と呼び、この時期の文化を**桃山文化**というんだ。んで、簡単にこの時期の文化の特徴をまとめようだね。

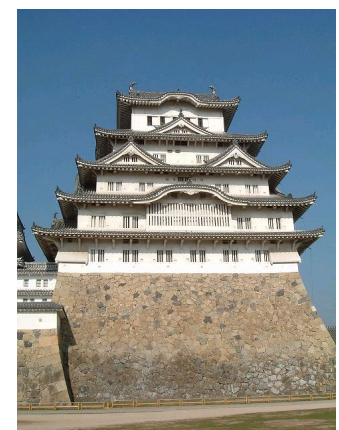
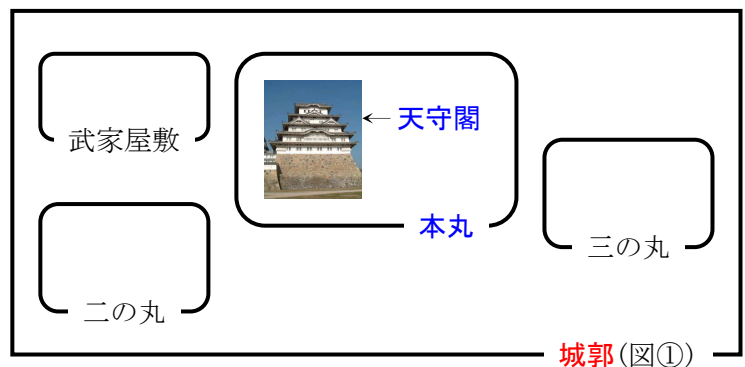
＜桃山文化の特徴＞

- ① 新興武家や富裕な豪商らが担い手となった豪華・壮大な文化
- ② 南蛮文化の影響

まず、この時代には織田信長や豊臣秀吉といった統一政権が誕生し、富と権力を牛耳ることになった(信長はその過程で死んじゃったけどさ)。だから、彼ら信長・秀吉や各地で大きな勢力を誇った大名たちが、そして、貿易などで儲けた豪商らが、自分の財力に物を言わせた絢爛豪華な文化を生み出していたんだ。たとえば、秀吉のつくった「黄金の茶室」なんてその最たるものだよ。これが①の特徴。そして、もう一つは、この時期にやってきた**ポルトガル人やイスパニア人などの南蛮文化の影響**だ。

[B] 建築

この時期は戦国時代や安土・桃山時代といった戦いの時代に当たるわけだから、当然お城がつくられるようになるよね。このお城のことを正確には**城郭**というんだ。この城郭の造りは、大きくて美しい**天守閣**という櫓を持つ**本丸**を中心に、二の丸や三の丸などを配している。…と言っても、意外に城の構造がどういうものなのか具体的にわかっていない人も多いと思うんだ。そこで、まずは右の図を見よう。



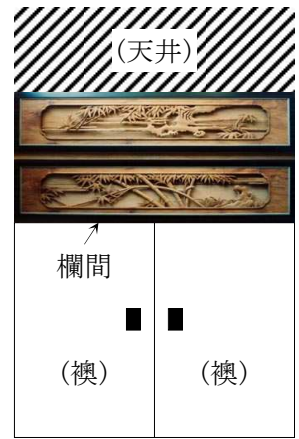
[天守閣(図②)]

そもそも、城郭(お城)というとき、よく図②のような何層かで構成された建物を連想する子がいるんだけど、これは**天守閣**という城の中にある一つの建物にしかすぎない。城というのは図①のように、いくつもの建物がたくさん配置されている全体のことを城郭という。そして、この城郭には**本丸**とよばれる中心となる区域、その次に中心となる二の丸・三の丸などといった区域があるんだ。基本的には、本丸には大名がいて、二の丸には嫡男や家臣たちが住んでいるというイメージを持ってもらえるといいかな？

そして、その本丸の区域の中に、図②のような何層にもなって構成された**天守閣**というものがある。その天守閣に大名がいて政務などを行っているわけだ。なお、こうした天守閣を造るにはそれだけの技術も必要だし、お金もかかるよね。だから、この天守閣が造られるようになったのは戦国時代の後期あたりからで、初めの頃はこんな何層にもなっている立派な建物は造られていなかったんだ。初めの頃の名は、主に一層で構成された**書院造**の館に住んでいたりした。こうした天守閣は造らず、主に一階建てで出来ている館や、天守閣の最上部で大名が居住する書院造のスペースを**居館**という。

さて、大名たちはこうした城郭に設けられた天守閣などに住んでいるわけだけど、当然大名の住居だから、その中は立派な造りになっている。例えば、襖とか障子があつたとするでしょ？そうしたら、単純に襖や障子があるだけでなく、その襖や障子に立派な絵が描かれていたりするんだ。極端なものになると、襖や障子に金箔が張ってあって、そこにまた絵が描かれているんだ。これを障壁画とかいうんだけど、詳しくは絵画のところの説明するね。

でも、その襖と天井の間には、当然右のようにスペースがあるよね。その空間にもちょっとしたお洒落を施しているんだ。右の写真のような、襖と天井の間にはめ込まれた、格子や透かし彫りの板のことを**欄間**という。

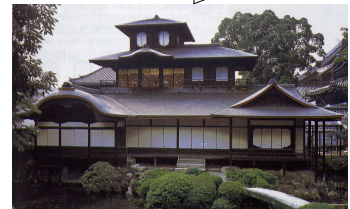


このような天守閣などをもつ城郭が全国各地に築かれていったんだけど、この天守閣を持つ城で、現存最古のものが愛知県にある**犬山城**だ。これはこの地を治めていた織田氏が築城したものなんだけど、「おっ？織田氏か！」って思ったよね。そう、あの信長の家系にあたる織田氏だよ。まあ、築かれたのは信長の生まれるずっと前だけだね。その織田氏から登場したのが織田信長で、彼はついに畿内を勢力下におく大大名に成長したよね。そこで、自分の権勢と天下統一のあり方を示そうとして 1576 年に建てたのが**安土城**だ。こいつの天守閣内部はそりゃ、もうメチャメチャ豪勢だった。例えば、襖の屏風には当世第一の絵師狩野永徳に描かせたりしているんだ。

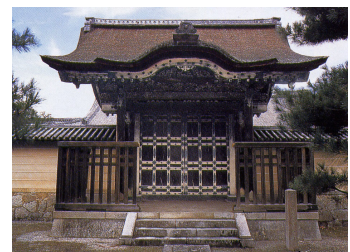
今までのものは信長関係の城が多かったね。でも、当然次の天下人の秀吉も豪壮な城郭を造っている。それが 1583 年に築かれた**大坂城**や**聚楽第**、**伏見城**なんだけど、実はこれらのどれも、その当時のものは現存していないんだ。大坂城は現存しているとは言っても、戊辰戦争の戦火によって大半が焼失しちゃっているし、1588 年に後陽成天皇の行幸が行われた聚楽第も今では存在しない。

この秀吉の建てた聚楽第は、天皇を迎えるぐらいだから、超豪勢だった。そして、この後、秀吉は関白を辞めて甥の豊臣秀次に関白を譲ることになった。それと同時に、この邸宅も秀次にあげたんだけど、後に秀吉に嫡子(秀頼)が生まれたため、徐々に秀次は秀吉からウザがられて、最終的に自害させられちゃったんだ。これに伴って、聚楽第も壊そうってことになったんだけど、さすがにもったいないよね。そこで、その大半を使って新しく伏見城を築城して、残りの一部を**西本願寺飛雲閣**と**大徳寺唐門**に移築したんだ。だから、今現在は存在しないため、豪華絢爛だった聚楽第を見ることはできない。…でも、待って！移築したって

聚楽第から移築



〔西本願寺飛雲閣〕



〔大徳寺唐門〕

聚楽第から移築



〔西本願寺唐門〕



〔西本願寺書院(鴻の間)〕

3つとも伏見城から移築した



〔都久夫須麻神社本殿〕

うことは、その伏見城とか、西本願寺とかの部分から聚楽第が復元できるんじゃない？…そう、カギは伏見城が握っているのだ。

ところが、その聚楽第の大半を移築した伏見城も 1623 年に江戸幕府により廃城とされてしまった。つまり、聚楽第を知る最大の手がかりであった伏見城も今はないわけだ。ただ、この伏見城の一部もまた**西本願寺唐門**や**書院(鴻の間)**から**都久夫須麻神社本殿・唐門**に移築されているんだ。つまり、これら移築したものから、当時の聚楽第や伏見城の一部を知ることが可能になるわけだ。だから、それぞれ**聚楽第・伏見城の遺構**といわれるんだ。

この秀吉がまだ信長の家臣だった頃には、彼は中国地方の毛利氏征伐を任せられていた。その中国征伐の拠点としていたのが兵庫県の姫路城だ。この頃の姫路城は今みたいな立派な城郭ではなく、これは江戸時代の1609年に姫路藩主の池田輝政が大改築を行って今の規模の平山城の姫路城になったんだ。なぜこの城がこれだけ有名かって言うと、この城は外見が美しいだけでなく、軍事的にも非常に優れた城だったから。そのため、こうした外見美と機能美を併せ持っていることから白鷺城とも呼ばれているんだ。



[姫路城天守閣]

さて、今まで出てきたこれらの城郭には、それぞれ丘に建てられたものもあれば、平地に建てられたものもあったんだけど、実はこうした築城法といったものは時代と共に変化していったんだ。簡単に築城城の形態を見てみよう。

＜築城法の形態＞

山城(山に築城) → 平山城(丘に築城) → 平城(平地に築城)

戦国時代の中期辺りまでは城を落とされないために山の上に造られる山城だった。これだと、攻める相手側としては山の上にあるし、非常に落とすのが難しい。城の上から弓矢でピュンピュン射られてしまうもんね。ところが1543年に種子島に鉄砲が伝わった。これにより攻める側も下からバキューンと撃ち返せるようになる。…ということは、もう山の上に城を造る意義はなくなってしまふよね。そのため、山から丘の上に造られる平山城へと変わっていき、最終的には領国経営の政治面を重視したため平地につくられる平城へと変わっていく。つまり、この築城法に大きな影響を与えたのは鉄砲の伝来だったんだ。

[C] 絵画

さっき建築のところで天守閣には殿様が居るとい話をしたよね。やっぱ大名っていうのは、その土地の頂点に君臨する人で、それだけ権威を持った人だ。そこで、大名自身の権威を象徴するために、天守閣の中には豪華な障壁画(障子や襖、壁に描かれた絵画)が描かれるんだ。ちなみにこれは障子や壁にそのまま描くんじゃなくて、紙に描いたものを貼り付けたもの。

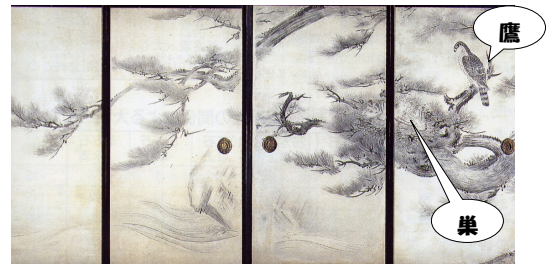
この障壁画には二つの様式があって一つは室町時代に完成した水墨画。そして、もう一つが金碧障壁画というもので、これは金箔を押した画面に緑や青、朱色といった濃い色彩を用いて描くんだ。まさにリッチの極みだよ、金箔の上に絵を描くなんて…。でも、金の上に絵を描くって結構難しいよね、だって色が付かないでしょ。だから、何度も何度も絵の具を塗り重ねて描くんだけど、この技法を濃絵というんだ。なお、読み方はあくまでも“だみえ”だからね。

さて、こういった障壁画がたくさん描かれて、その作品がいっぱい残っているんだ。この中心となったのが室町時代に登場した狩野派だ。室町時代の狩野派は正信・元信と続いたよね。その元信の孫で、狩野派の隆盛を築いたのが狩野永徳。この人の作品の『唐獅子図屏風』だけは絶対に覚えておかなければダメだよ。白黒写真だとわかりにくいけど、この雄雌の獅子(ライオン)以外の余白は金で仕立ててある。まったくもって贅沢の極みだね。また、狩野永徳はこの他にも『檀図屏風』や『洛中洛外図屏風』といった作品も描いているけど、後者の方に関しては、風俗画という分野のところで扱おう。



[唐獅子図屏風] by 狩野永徳

その永徳が死んだあと、永徳の様式を受け継いだ代表的な画家が、彼の弟子の**狩野山楽**だ。彼の作品には二つあって、彼の最も雄大な作品が『**松鷹図**』だ。またまた白黒だからわかりにくいんだけど、この作品の余白は金とかは使っていないんだ。だからこれは**水墨画**なんだ。ちなみにこの絵は**松**の枝にとまっている親の**鷹**が巢のヒナを守っている様子を描いたものだよ。まあ、ぶっちゃけ、そんなのは気にせず作品と作者を覚えておけばいいんだけどね。その覚え方は後でまとめて教えるから安心してくれ。さて、同じく彼が描いた金碧画が『**牡丹図**』で、こちらは金碧画だからやっぱり余白は金になっている。



〔松鷹図〕 by 狩野山楽



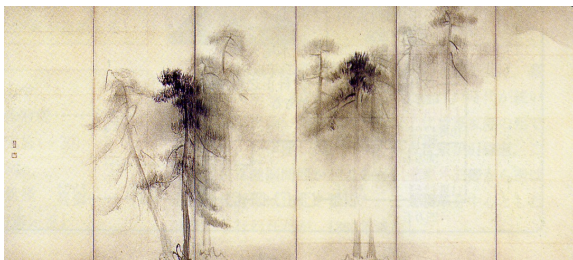
〔牡丹図〕 by 狩野山楽

一方で、この狩野派以外にも作者がいる。その中で有名なのが、雪舟5代目を自称した**長谷川等伯**で、彼は『**智積院襖絵**』という金碧障壁画を描いている。こ



〔智積院襖絵〕 by 長谷川等伯

これは『唐獅子図屏風』に次ぐ頻出の作品だね。ちなみに真ん中の黒いでかいものは**楓**の巨木だそう。また、もう一つの作品の水墨画『**松林図屏風**』は何かぼやけているけど、これは**霧**にけむる松林を描いたものだから、そりゃぼやけて見えるよね。狩野派以外の画家は等伯の他にもう一人有名なのがいる。それが近江の武士であった**海北友松**で、彼的水墨画の作品としては『**山水図屏風**』が有名だね。



〔松林図屏風〕 by 長谷川等伯



〔山水図屏風〕 by 海北友松

でも、こういった作品と作者って覚えにくいよね。そこで、これらはゴロで覚えておくといいかな。

＜狩野派以外の作品の覚え方＞

☆「長谷川、勝利のチン射で解放ざんす」

長谷川 → 長谷川(はせがわ)・勝利 → 松林(しょうり)・チン射 → 智積院(ちしゃ)
解放 → 海北(かいほう)・ざんす → 山水(さんす)

さて、狩野派というのは今あげた永徳と山楽以外にもいろいろいる。その永徳も含めて狩野派と呼ばれる人たちの作品が多いのが**風俗画**と呼ばれるジャンルなんだ。これはその名の通り、風俗嬢についての絵…ではなく、庶民とかの市井の風俗を描いたものだ。ほら、大名たちは天守閣に住んでいて、市内の様子とかはわからないでしょ？だから、こういった市内の様子を風俗画として描かせたりしたんだ。その中で有名なのがやっぱり**狩野永徳**で、京都の市内や洛外、市民の様子を描いたのが『**洛中洛外図屏風**』だ。これは織田信長が上杉謙信に贈ったことで有名だね。他にも**狩野吉信**の『**職人尽図屏風**』や、狩野秀頼の『**高雄観楓図屏風**』などがあるけどこれらは外していい。逆に外せないのが、永徳の末弟の**狩野長信**の描いた『**花下遊楽図屏風**』だ。これは桜の花の下で、貴人とお供の男女が遊楽するものを描いたものだよ。



〔花下遊楽図屏風〕
by 狩野長信

ちなみに、狩野派はこの風俗画以外にも南蛮人との交流や風俗を主題にした南蛮屏風というものを多く描いているけど、『世界地図屏風』や、『泰西王侯騎馬図屏風』などのこれらは聞かれないので安心してくれ。ただし、これらを描いたのは宣教師ではないからね。これらは宣教師が自らの布教と南蛮文化を理解させるために、南蛮人やその風俗を狩野派の画家に頼んで描いてもらったものなんだ。



[南蛮屏風]

……随分、狩野派も頑張ってくれたもんだよね。ある意味、こいつらが頑張ってしまったおかげで君たちが覚える作品が多くなってしまったわけだ。まずは、入試に出る狩野派の画家とその作品を並べてみよう。

＜狩野派の作品＞

- 狩野永徳…『唐獅子図屏風』・『檜図屏風』・『洛中洛外図屏風』（風俗画）
 狩野山楽…『松鷹図』・『牡丹図』
 狩野長信…『花下遊楽図屏風』（風俗画）

…やっぱ多いよね。そして混乱するよね。もちろん写真も見ておかなければならないけど、作品と作者が混乱しやすい。…でも、ご安心を。ちゃんと根本式ゴロ合わせによる覚え方があるのだ。

＜狩野派の作品の覚え方＞

☆「長野で話したAからBの参照用ボタン」

長野で話した → 長信(ながの) = 花下遊楽(はなした)

AからBの → 永(A)徳 = 唐獅子(から) / 洛中洛外(ら) / 檜(Bの)

参照用ボタン → 山楽(さん) = 松鷹(しょうよう) / 牡丹(ボタン)

簡単にシチュエーションを説明すると、長野に遊びに行ったら、「A」ボタンと「B」ボタンがついているスイッチがあったんだけど、「これは押しはいけません。参照用です」という変な注意書きがしてあったという意味不明なシチュエーション。

[D] 芸能

さて、芸能の茶道に入っていこう…、と言う前に、まず茶道の歴史を簡単に振り返っておこうか。詳しくは室町時代のところを参照してほしいけどね。

鎌倉時代に栄西がお茶を日本に伝えたけど、南北朝時代までは、ただの飲み会のようなものに過ぎなかったよね。それが東山文化の時期になると、今までの飲み会でしかなかった“お茶”に、村田珠光が禅の精神を取り入れて本格的に静かな中で茶を味わう“茶道”というものが始まった。こういった茶道の、素朴で簡素な茶室で心の静けさを求めるというものが侘び茶というものだったね。そして、この村田珠光が創始した侘び茶を武野紹鷗が引き継いで、さらにそこから茶道としての侘び茶を桃山文化期に大成したのが、堺の豪商出身の千利休(宗易)だったんだ。つまり、3人の人物によって、時代をまたいで“茶道”は完成されたわけだね。



[千利休]

そして、その“茶道”がこの桃山文化の時期になってすごいブレイクしたんだ。それは何故かというと、信長とか秀吉とか諸大名に保護されたから。まあ、簡単に言うと、“茶道”っていうのは、その当時の大名のステータスであったんだ。大名ってのはさっきも話したように、自分の権勢を誇示しようとしたよね。だから、その一つとして当時流行っていた茶道を保護して、そのための茶碗とかも良い物をたくさん購入しようとしたんだ。

例えば、あの織田信長なんかも松永久秀と「平蜘蛛」っていう当時最高の茶器をめぐって対立している。もともと、この「平蜘蛛」は松永久秀が所有していたんだけど、畿内では信長の勢力が強くなってきたので、久秀は信長の家臣となることになった。そこで、その誠意を示すために、これまた当時最高級の茶器「九十九髪茄子」という茶器を信長に献上したんだ。もちろん信長は大喜び！今まで久秀は自分の仕えている大名の嫡子を毒殺したり、将軍を暗殺したり、寝返ったりと悪人として有名だったんだけど、あえて信長は彼を家来にすることにしたんだ。…でも、信長としてみれば、「九十九髪茄子」だけじゃなく、「平蜘蛛」の方も欲しくてしょうがない。そこで、久秀に「くれや」って言ったんだけど、久秀は「平蜘蛛だけはダメ」って断ったんだ。そら、だんな欲張りすぎですがなって感じだね。

ところが、信長としてみればやっぱり欲しい。そして、二人の関係は徐々に悪くなって、最終的に久秀はまた寝返ってしまった。そのため怒った信長は久秀の城に兵を差し向けて、ついに久秀は天守閣まで追い詰められたんだ。普通なら、自分の保身に走って、この「平蜘蛛」をあげて許しを乞うたりするでしょ。でも、久秀はここが違う。その天守閣に登って、その上から「おい、信長てめえこのやろう。欲しいだろ？俺の「平蜘蛛」欲しいんだろ？……誰がてめえなんかにあげるか！てめえにあげるくらいなら爆破しちゃうわ！」って感じに、その「平蜘蛛」と一緒に自分の身も爆破させて死んでいったんだ。……壮絶というより、ダイナミックだね。…といったように、大名はそれだけ茶器の名器といったものを欲しがらるわけだ。君たちも小学生の頃、カードのレアカードなどを集めようとした感覚と同じような感じだね。

このように、大名の中で茶道がめちゃめちゃブレイクしていることがわかる。そして、その当時、「天下一の茶匠」と呼ばれたのが千利休だったわけだ。彼の茶道の精神も、侘び茶に基づくものだから非常に簡素なもの。これを最も象徴しているのが、千利休の茶室である妙喜庵待庵だ。これはたった2畳しかない茶室で、すっごい小さい入り口から入るんだ。そこで、ハゲの千利休と二人っきりでお茶……。俺なら絶対に逃げ出すね。なお、この千利休の弟子はたくさんいて、武家的茶道を成立させた古田織部や、如庵という茶室を造作した織田信長の弟織田有楽斎が有名どころだ。



[妙喜庵待庵]

こうした No.1 の茶匠である千利休から茶道を学ぼうとした大名が信長や秀吉で、特にこの豊臣秀吉は 1587 年の島津氏討伐のあと、京都の北野神社で北野大茶会という茶会を開催している。これは身分にかかわらず誰でも参加することが出来て、千利休・今井宗久・津田宗及といった三宗匠（茶道の三傑）も参加したんだけど、要はただの茶器の名器の自慢大会みたいなもの。例えば、この時秀吉は、自分の自慢である大坂城の「黄金の茶室」を持ち運んでそれを披露している。だから、秀吉としてみても「俺の茶室とか茶碗すげえべ？」って自慢するために大会を開いたわけだね。

でも、もちろん秀吉だけじゃなく、他の大名も茶碗を集めている。秀吉の時に朝鮮出兵ってあったでしょ？実は当時、朝鮮は陶磁器の大産地だった。そこで、西日本の大名たちは出兵のついでに、朝鮮人の陶工たちを強制連行して日本に連れ帰ってきたんだ。そして、自分の国に連れ帰った大名たちが、朝鮮人陶工に陶磁器をつくらせたことにより、その土地で有名な陶磁器が作られていった。それがお国焼と呼ばれるものだ。例えば、鍋島氏では有田焼、島津氏では薩摩焼、毛利氏では萩焼、松浦氏では平戸焼といったものが生産されるようになったんだ。なお、この中で特に有名なものが有田焼で、この有田焼も朝鮮出兵の際に朝鮮から連行された鮮人陶工の李参平が創始したものだ。

こうした侘び茶を大成した千利休だったんだけど、実は当時彼を保護していた秀吉とは、ちょっと茶道に対する価値観が異なっていた。秀吉は「黄金の茶室」を造ったりと派手なものを好んでいたんだけど、利休は「そうじゃない、茶道の本質は侘びなんだ。だから、簡素にいかないとダメなんだ」というように考えていた。

だから、その「侘び」の精神を茶碗にまで反映させようと考えた。そこで、彼が京都の陶工長次郎に命じて作らせたのが**楽焼**だ。この焼き物は絵柄とかはまったく無しの黒一色でできた茶碗で、めっちゃめっちゃ渋い「侘び」の精神が出ているよね。そして、これを京都の聚楽第で焼いたことから、その聚楽第の「楽」をとって楽焼といい、これ以降京都では長次郎の子孫である楽家が代々作成するようになったんだ。

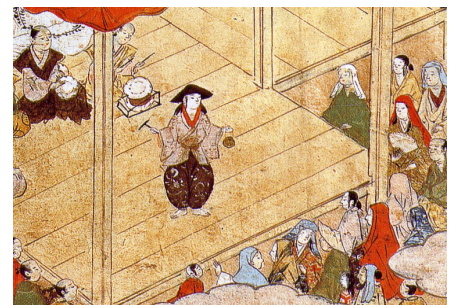
つまり、茶道に対する千利休の価値観は「侘び」という渋さを求めるもの。それに対して、秀吉の茶道に対する価値観は「黄金の茶室」からもわかるように、華やかさを求めるもの。こうした対立や、最終的に利休が大徳寺の山門上に自分の木像を置いたことなどが秀吉の逆鱗に触れ、利休は自害を命じられちゃったんだ。



〔楽焼〕 by 長次郎

さて、今解説をした茶道は基本的には上層階級の間で流行っていたもの。でも、下層階級の間では、そこまでお金もないし、茶道なんて出来るわけない。だから、やっぱり庶民の文化といたら今まで見てきたのと同じように「歌う」か「踊る」かのどちらかなんだ。これらはどちらもお金がかからないもんね。例えば、「歌う」なら、この当ても室町時代から引き続いて**小歌**(男女の恋愛歌謡)が流行っている。でも、それまでのものはただ“詩”だけのことで、伴奏というものはなかったんだ。これに節付け、つまり作曲をしていったのが**高三隆達**という人物だ。よく教科書には「小歌に節付け…」なんて難しく書いてあったりするけど、要は作曲したっていうだけのことで。んで、じゃあ実際にはどうやるかという、この小歌に小鼓とかの伴奏をつけて歌うんだ。これを彼の名前から**隆達節**と言う。

じゃあ、「踊る」は？それが**出雲大社の巫女**と称した**出雲の阿国**が始めた**阿国歌舞伎**だ。これを京都の北野神社などで興行してみたら大ヒット！やがて、諸国の遊女たちがこれを真似るようになっていき、江戸時代には女歌舞伎として発達していったんだ。ちなみに、この「かぶき」とは「傾く」からきた「かぶく」という、常識はずれの行動をしたり、奇抜な格好をしたりすること。南北朝時代の頃にも似たような人々がいて、その場合は「ばさら」と呼んだんだけどね。



〔阿国歌舞伎〕

つまり、この頃から徐々に文化の中に“人々に見せる”文化が生まれていったわけだね。今ならサッカーを見に行くとか、コンサートに行くとか“見るもの”はいっぱいあるけど、この当時まではそんなものなかったからね。そりゃ、きれいな女の人が踊っていきや、みんな(男は)見に行くでしょ？

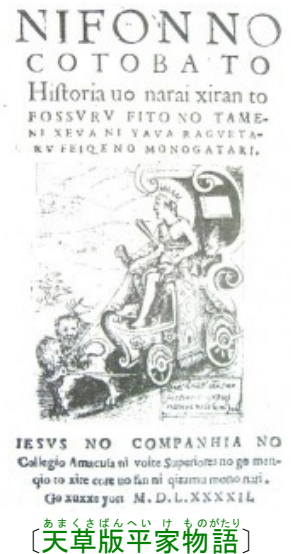
こうした“人々に見せる”ものとして、もう一つこの当時から始まったのが、**人形浄瑠璃**だ。これは、人形芝居の高度なものなんだけど、実際には江戸時代の元禄文化になってから爆発的にヒットしていく。じゃあ、どうやってやるのかっていうと、人形劇みたいに**人形を操って**、その横で別のオッサンが**浄瑠璃節**という語り(ナレーション)をしていくんだ。つまり、人形を操る人と、台本を読むナレーターがいるわけだね。でも、それだけじゃ寂しいでしょ？そこで、その後ろで**琉球**伝来の**蛇皮線**から発達した**三味線**による演奏で、場面を盛り上げたりするんだ。なお、この人形浄瑠璃と歌舞伎に関しては、江戸時代に発展していくので、江戸時代のところで詳しくまた解説する。ちゃんと江戸時代とつなげて学習するようにしてね。

〔E〕印刷

じゃあ、ラストに印刷の歴史を見ていこう。今までの日本での印刷技術というものは、木版に文字を彫って、それに墨を塗って紙に刷る木版印刷が中心だった。一方で、朝鮮ではすでに**木活字**(木による印刷のための版)や**銅活字**(銅による印刷のための版)を用いた活字印刷(この活字とは、雑誌などでいう

活字のことではなく、“活字”という版のことが発達していた。これが、秀吉の朝鮮出兵の際に日本にも伝わって、以後日本でも活字印刷術が行われるようになったんだ。そして、この木活字の技術を用いて、後陽成天皇の勅命で出版された一連の書物を総称して慶長勅版という。こうして、この活字印刷術が今までの木版印刷に代わって日本でも主流となっていくんだけど、これが日本に定着することではなく、結局江戸時代の寛永期ごろからは、再び木版印刷が主流になってしまった。まあ、その理由は漢字と仮名を組み合わせる日本語表記の難しさからだろうって言われている。

一方で、宣教師のヴァリニャーニによってヨーロッパの活字印刷術も伝来した。これは銅活字(銅による印刷のための版)を用いたもので、この技術を用いてイエズス会により出版されたものを総称してキリシタン版(天草版)というんだ。じゃあ、具体的にどういったものが出版されたかという、キリシタンの入門書である『どちりな=きりしたん』や、平家物語をローマ字で記した『天草版平家物語』、イソップ物語をローマ字で記した『天草版伊曾保物語』、そして日本語とポルトガル語の辞書である『日葡辞書』などがある。でも、右に「NIFONNO COTOBA(日本の言葉)」と書かれてるように、全部ローマ字で書かれている…。ローマ字で書かれても困るべ？すげえ読みにくいもん。だから、結局これも日本には根付かなかったんだ。



ところで、以上の説明で大体わかったかな？実は、話がややこしくなるだろうと思って、少し説明を簡略化したんだ。だから、詳しく知りたい場合は下の印刷の歴史を読んでほしい。ただ、入試では本木昌造以外出ないけどね。

[印刷の歴史]

朝鮮侵略によって新しい印刷技術が伝来するまでは、「木版印刷」が主流だった。これは君たちが小学生の頃につくった版画と同じもの。つまり、木の板に文字を彫って、それに墨を塗って紙に刷るわけだけど、これだと新しいものを印刷したい場合には、いちいち毎回新しく彫らなきゃいけないよね。だから、非常に面倒な作業が必要なんだ。

こうした「木版印刷」に対して、朝鮮侵略によって朝鮮から伝来したのが、「活字印刷術」というものだ。ちなみに、この活字印刷の“活字”とは本などに印刷された字の“活字”のことではない。辞書で調べてもらっても結構なんだけど、この“活字”とは印刷のために用いる版のことなんだ。これは、この版の面に、合金を使って文字とか記号を凸形にするもの。つまり、「木版印刷」は木版に彫って凹形にしたもの、「活字印刷」は“活字”という版に合金を付けて凸形にしたものということだ。

しかも、この活字印刷の優れているのは、それぞれ一字ずつに分かれているところ。どういうことかということ、 “日”っていう漢字のついた活字(その版のこと)があったり、“本”といった漢字のついた活字(その版のこと)がいくつもあるんだ。そして、それを2つ組み合わせることで、“日本”という文字をつかって印刷することができる。つまり、漢字、仮名それぞれ一つ一つの版があって、それを組み合わせて文章をつくるわけだね。

こうした版の元となるものには、木や銅、金属があって、それをそれぞれ木活字とか銅活字、金属活字と言う。んで、特に朝鮮から伝来した印刷術は主に木活字で、ヨーロッパから伝来したものは銅活字が主流だったんだ。ただ、後者はヨーロッパから伝わったわけだから、当然日本語の活字ではなく、“U”とか“N”、“K”、“O”といったローマ字の活字であったんだけどね。

でも、こうした新技術だったんだけど、日本では漢字とか仮名とかが多くてややこしい。ローマ字なら26個の活字で済むけど、日本語は平仮名だけでなく、漢字も多いから非常に面倒だもんね。「あ〜、“日”って活字が見当たらなくなっちゃったよ〜」とか無くしちゃったりするかもしれないでしょ？そのため、結局江戸時代の寛永期ごろからは、もともとの木版印刷のほうに戻っちゃったんだ。じゃあ、それがいつまで続いたかという、明治初期に本木昌造が鉛製の活字印刷を發明するまで。この鉛製印刷っていうのも、活字印刷の一つだよ。桃山期の頃は、銅とか、木を使って活字をつくっていたけど、それをただ鉛(元素記号Pb)でつくったというだけだ。